
You Are Not ONLY ～Dr 佐々木シリーズ外伝～

杜若

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

You Are Not ONLY 佐々木シリーズ外
伝

【Nコード】

N3980L

【作者名】

杜若

【あらすじ】

1990年代末、地方都市の白鳳大学病院で二年目の研修医として働く片丈一郎は、その口の悪さと不遜な態度から指導教授との摩擦が絶えず、ついに懲罰的な意味で二次救急施設である坪内総合病院救急科に

派遣される。そこで科長として献身的に救急医療に携わる小鉢医師に片は激しい反発を覚える……

「砂の船」に登場した坪内総合病院救急科を舞台に繰り広げられる

第一話（前書き）

1990年代末、地方都市若槻市の白鳳大学病院で働く 外科の二年目の研修医

である片丈一郎は、口の悪さと不遜な態度で指導教授との摩擦が絶えることは

ない。ある日ついに懲罰的な意味で、坪内総合病院救急科へ派遣される。

そこで科長として働く小鉢医師の献身的な態度に、片は過去のある経験から

激しい反発を抱くのだが……

第一話

Introduction

医師国家試験に合格したと判った時、片丈一郎《かたじょういちろう》は

まず真つ先に一冊の蔵書をバラバラに分解した。

「シュバイツアー」

数十年前に発行された児童向けの本は、何度も読み返したせいで手あかで薄汚れていたが

装丁はまだまだしっかりとしている。

力を籠めてページを引っ張ると、文庫本の数倍の厚みのあるそれは悲鳴に似た音をたてて背表紙から引き剥がされる。

胸に湧き上がった僅かな罪悪感を唇をかみしめる事で押し殺し、片は黙々と作業を続けた。

やがて全てのページを分解し終わると、紙の束を片手にシュレツダーのスイッチを入れる。

唸り始めた低いモーターの音を聞いていると、

片の脳裏に鮮やかに父親を茶毘に付した時の様子が蘇ってきた。

自殺、ということで大っぴらな葬儀は行う事が出来ず、母と姉、そして自分だけが見送る中

父の棺は古びた台車に乗ってゆっくりと火葬炉の中に運ばれていく。その時ずっと聞こえていた台車の軋む音に、このモーターの音はそっくりだ。

苛立ちと怒りが同時に腹の底から湧きあがり、

ぶつけるような激しさで紙の束を投入口に押し込む。

モーター音にガリガリと刃が紙を切り刻む濁った音が混じり、

受け皿に細切れになったページが積み上がって行く。

さらに片は机の引き出しを開けると、実習で使っていたメスを乱暴

な動作で取り出し

それを思い切り表紙だけになってしまった「シュバイツァー」に突き立てた。

衝動のままにメスを表紙に叩きつけていると、やがて刃が折れた。その軽い衝撃と、乾いた冷たい音にようやく片は我に返る。

切り裂かれた表紙に描かれた老人は、相変わらず柔和な笑顔で片を見つめ返していて、

いつのまにかモーターの音は止まっていた。

受け皿に山盛りになった細切れの紙クズと表紙を纏めてゴミ箱に突っ込むと、

本棚からもう一冊、皮張りの表紙の分厚い本を取り出す。

剥げかけた金色の箔押しで「日記帳」と書かれたそのページを、片は先ほどと同じように力を籠めて引き裂こうとした。

だが、ページを埋め尽くす群青色のインクで書かれた父親の繊細で几帳面な文字を見たとなん

ページを引っ張る指から力が抜けていく。

それを引き裂く代わりに、片は微かに震える指先でページをめくっていた。

象牙色の紙を埋め尽くす群青色の文字は、十四年前の春のある日で終わっている。

片は日記帳を閉じるとそれが聖書であるかのように、革表紙の上に右手を

置き宣誓をするような小声ではあるが、きっぱりとした口調で呟く。

「俺は、親父のような医者にはならない」

Chapter 1

「片君、私は君が優秀な研修医であることは理解しているよ」

白鳳《はくほう》大学病院第一外科、医局。浅く椅子に腰かけて、組んだ両手の指を一瞬の落ち着きもなく動かしながら言葉を紡いで

いく田村教授を、

片は薄笑いにも似た表情を浮かべて見つめた。

「ありがとうございます」

明るく、朗らかにすら聞こえる口調で礼を言った片に、

教授は癩性にこめかみをひくつかせながら

それでもかろうじて笑みらしきひきつりを口元に浮かべる。

生意気なひよっこをそれでも優しく教え諭す指導者を気取りたいの
だろうな、

と片は冷やかに胸中で分析した。

「だがね、医者は技術だけじゃ駄目なんだよ」

「判っていますよ」

「判っているのなら、なぜ君は態度を改めない」

「誰に対して、のですか」

「患者さんにきまっているだろう」

律義に問い返していく片に、ついに教授は声を荒げた。

時刻は午後の四時。今日は大きな手術の予定もなく

医局にはいつもに比べて多くの医師や研修医達が詰めていた。

その誰もが息をひそめながらも、好奇心旺盛な視線を怒鳴る教授と
対象的に薄笑いを浮かべる片に向けていた。

「この間の喫煙所での一件は何だね」

「あれですか」

片の唇がはつきりと笑いの形に歪んだ。

「いくら術後の経過が良く、退院間近とはいえタバコを吸うような
がん患者に

当然の事を言っただけですが」

「モノには言いようがあるだろう、よりによって手術は時間の無駄
だったなどとだねえ」

「その通りじゃありませんか」

小さくため息をつく片は再び口を開く。

「我々は病の元を取り除き、患者の治癒に全力を尽くします。ですが

患者本人が自らの意思で再び病院の原因となるような物質を接種しているなら、

我々のしたことは時間の無駄以外なんだというのですか」

「君がそう思っていたとしても、言い方を考えたまえ」

「自分の癌の手術をした医師の一人に向かって『何をしようと俺の勝手だ』と叫ぶ患者に

優しく諭した所で聞き入れてもらえるとは思いませんがね」

「むむむ」

田村教授は顔を赤黒くさせて黙りこむ。

周囲の医師達がつばを飲み込む音さえ聞こえそうな張り詰めた沈黙は

「所で、片君は他の研修医達に比べて当直の回数が大分少ないね」

怒りにかすれる教授の声に破られた。

どうやらこれ以上問答をしても自分の不利と悟ったらしく、強引に話題が替えられる。

「皆無ではありませんし、勤務は真面目に取り組んでいますよ」

「私が研修医の頃は給料すらでなかったよ、それでも勉強させてもらっているのだから

という自負があったから、指導医に言われれば、何でも「はい」と引き受けたものだが

時代は変わったねえ……」

「失礼ですがそれは教授自身の主観にすぎませんよ」

不敵な表情のまま、片は教授の嫌味に真っ向から立ち向かう。

「研修医は修業中の身ですが、奴隷ではありません。それに俺は体がぼろぼろになるまで働き続けることに喜びを感じるようなマゾヒスティックな趣味はあいにく持ち合わせていないのですよ」

「口を慎みたまえ!!」

ついに教授は椅子を蹴倒す勢いで立ち上がり、両手を机に叩きつけた。

それでも片は表情を変えることさえせず、

「お話は以上ですか、では回診の時間ですので失礼します」

慇懃に一礼した。

「お母上の白衣の下に逃げ込めると思ってた小僧っこがずいぶんと増長したものだ。

お父上が今の君を見たらさぞかし嘆くだろうよ。やはり血より教育だな。

私は長生きをして、自分の子供をしつかりとしつけないものだ」

部屋を出ていこうとする片の背に投げつけられた教授の精一杯の皮肉の反撃に

びたりと彼の足が止まった。

瞬時に又張りつめた沈黙が部屋の中に落ちる。

部屋の誰もが片が再び教授の前に引き返して、嫌味と皮肉の砲火を浴びせるだろうと身がまえたが

片は、無言のまま医局を出て行った。

Chapter 2

「姉さん、来るならもう少し早く連絡してよ。俺が当直だったらどうするつもりだったのさ」

「ごめんなあ」

日曜日の夕刻、人と車で混雑し始めた駅前で姉の晶子《しょうこ》は迎えに来た片に謝りながらも、

「でも休みやったんやから、結果オーライってことで」

と次の瞬間にはにっこりと笑って彼の運転してきたランドクルーザーの助手席に乗り込んだ。

「休みでも、予定があったかもしれないぜ。デートとかさ」

「そんなときは遠慮してまっすぐ帰るで。でもあんたの事やから休日はデートよりもドライブか料理やろう、ちがった？」

と、あっけらかんと言いい放つ姉に片はハンドルを握りながらため息をつく。

「ま、そうだけどさ」

この五つ上の姉にはどうにも敵わない。

「一日中海岸沿いをドライブしてたよ。姉さんはどうして急にやって来たのさ」

「東京で開かれた学会に出席してたんよ。本当は泊まりの予定やったんやけどな」

大阪で美容外科を開業している晶子は、しばらく会わないうちに怪しげな関西弁を喋るようになっていた。

「隣の席に座っていたおっさんがそりゃあ熱心にアフターのお誘いをかけてくれはって。

会場にはピチピチのお姉ちゃんたちもぎょうさんおったのに、わざわざ三十過ぎの

おばはんを御指名してくれたのはありがたいんやけど、どうひいき目に見ても

好みやなくてなあ。学会が終わってもぴたーっとくっついて離れる気配がないもんやから、

すぐに帰りますうって、新幹線に飛び乗ってしまったんよ」

時折身ぶり手ぶりを交えながら喋り続ける晶子は、二十六歳の片と同年に見える位

若々しい容姿をしている。双子ですかと尋ねられた事も一度や二度ではない。

まあ、美容外科医ともなれば、自分の容姿を一定のレベル以上に保ち続ける事も仕事の一つなのだろう。

「久しぶりの東京やったのになあ、ってがっかりしてたら、ふとあらんたの事

思い出してね。一昨年の正月にあったきりやから、元気かなあと思って途中下車したんよ。

ついでに最近美味しいご飯と御無沙汰してるし」

「というか、目的は飯で俺の方がついでだろう。時間が時間だから、あまり凝ったもんは

作れないぞ。ドライブの途中で寄った漁港で鯛を買ったから、

刺身と……後は兜煮くらいだ」

「十分や。外食は続くと疲れるんよね。あ、ついでに粗でうしお汁も作って」

「はいはい」

片は呆れたように呟いてハンドルをきった。

彼が住む若槻市は東京から新幹線で一時間半の所にある特徴はないが、

地方都市の中では活気のある街だ。そこにある白鳳大学の医学部に進学したのを機に

都内の実家を離れ、一人暮らしをはじめて八年が過ぎようとしている。

ランドクルーザーが止まったのは、二〇階建ての高層マンションの駐車場。

フロントに二十余時間常駐しているサービススタッフの意味ありげな視線を浴びながら

二人はエレベーターに乗り込んだ。

※

「相変わらずキッチン以外はすごい有様やなあ」

医学書や着替えが所構わず散乱し、殆ど床が見えないリビングダイニングを見回して、晶子は呆れたように言った。

「しかも寝室があるのにソファで寝てるん？ 母さんが知ったら嘆くで」

「研修医の生活を知らないわけじゃないだろう。昼夜関係なく体力の限界まで雑用に追いまわされて、部屋を移動する暇があったらその分長く寝ていたいんだ。母さんが目くじら立てるなら

この部屋をでていくよ。雀どころか蟻の涙ほどだけど一応は給料をもらっているんだし」

「出来もしない事を言わんの」

姉は苦笑しながら、ソファの上にだらしなく広げられた毛布を畳んで隅に置いてから、そこに腰を下ろす。

「二十畳のリビングダイニングに寝室、システムキッチンドイツ製。

そんな部屋に住んでいた人が、今更六畳一間の風呂なしアパートには住めへん

大人しく親のすね齧るとき」

「だったら文句はその位にしてくれよ」

「はいはい」

すっかりくつろいだ様子でテレビをつけた姉の後ろ姿にやれやれと肩をすくめて、

片はリビングダイニングとは対照的に整頓され、磨きたてられたキッチンに

今日の収穫が入れられたビニル袋をぶら下げて入った。

染み一つない真っ白のまな板の上に乗った黒みがかった桜色の真鯛を男性にしてはほっそりとした長い指が握る包丁が、無駄のない美しいとさえいえる動きで捌いていく。

「うわ、相変わらず美味しそうやなあ。新幹線下りて正解やったわ」
四十分後、無垢材のテーブルの上に並べられた刺身や兜煮などの料理を見て、

晶子が子供のような歓声を上げる。

冷酒を満たした薩摩切子のグラスで乾杯をして、久しぶりの姉弟二人の夕飯が始まった。

「で、あんた何をやったん？」

晶子が尋ねてきたのは、皿がほぼ空になった頃だ。
相変わらずの軽い口調だが、表情は酷く真剣だった。

「何やったって言われてもなあ」

姉から目をそらし、気まり悪げに骨ばかりになった鯛の頭を箸先でつつきまわす片に、

「心当たりはあるんやろう？何もやらずに大学から追い出されるわ

けないんやから」

さらに晶子は畳みかける。

「追い出されたわけじゃない。医師不足の病院に手伝いと勉強を兼ねて三か月ほど

派遣されるだけだよ」

「阿呆」

片の鼻先に、白と紫の色彩が突き付けられる。綺麗にマニキュアを塗った晶子の指先だ。

「坪内総合病院の救急科といえば、二次救命施設の中でも忙しさは戦場なみや。

常勤医は二名しかおらんのに、歓楽街で有名な猿若町から一番近い病院やさかい、患者はひっきりなしに運ばれてくる。

研修医二年目のあんたが現場に入った所で、勉強どころか足手まといになって

役立たずの烙印を押されて、返されるのがオチや」

「……あの陰険な性格の教授がやりそうなことだな、でも姉さん何でそこまで知っているんだよ」

苦虫をかみつぶした表情で、片は驚く。医局で教授とやりあった日から二週間がたっている。

片自身もこの一件を知らされたのは三日前の事だ。

「片君の優秀な腕前をぜひ現場でいかしてほしくてね」

と言った時の教授の歪んだ笑いと猫なで声は、今思い出しても背筋におぞ氣がはしる。

「外科医の世界の狭さを甘く見ない。規格外の人事や噂はすぐに広まるんよ。

片なんてめったない名字だし、母さんが良くも悪くも目立つ人だから、余計、ね」

「へえ」

片は自分の唇に笑みが浮かぶのを感じる。鏡が目の前にあるわけで

はないが、

酷く歪んだモノであるという確信はあった。

「儲け主義で有名な片美容整形外科の院長の息子がってか。医者って人種は

他人の成功を妬む奴が多いと思っていんだけど、

息子の人事まで母さんの誹謗中傷のネタにするなんて流石だねえで、どんな尾ひれがついているんだい」

「丈一郎」

会って初めて晶子はため息交じりに弟の名を呼んだ。

「いくらなんでもそこまで性格のねじくれた医者はおらんよ。

まあ、蔭口の一つや二つは聞こえてくるけど、今更そんな事で傷つく私や母さんやあらへん。

私が心配なのはあんたの事だけや。で、本当に何やったん？」

再三尋ねられて、やっと片は渋々二週間前の医局での出来事を姉に話した。

「丈一郎、あんたなんで臨床医になったん？研修医制度が不満なら、厚生省の技官にでもなればよかったのに」

「俺は別に、今の研修医制度を変えたいなんて大層な事を考えちゃいない」

グラスの底に残った僅かな冷酒で唇を湿らせて、片は答える。

体の奥から酔いとは別の熱が、苛立ちを伴ってゆっくりと湧き上がってきた。

「ただずつとそうだったという理由だけで、

研修医が碌に休みも給料もなく奴隷同然の扱いを受けるのを当然だと思ふ空気と、

苦しい時だけ医者に泣きついて、痛みが取れば医者の忠告に怒鳴り返すような病人が

我慢できないだけだ」

「あのなあ」

吐き捨てるようにそう言って、指が白くなるほどテーブルの上で拳

を握りしめる弟に、

姉は宥めるように語りかける。

「丈一郎の言っている事は正しいし、理解もする。

でもな、世の中には正論でつかかっていてもどうにもならん事があるんよ。

あんたがぼろぼろになるだけや……それに」

「それに？」

「いくら今あんたが突っ張って正論を叫んでも、お父さんは戻って来んよ」

「何でそんな話になるんだよ」

ついに片は声を荒げた。

「俺は唯、黙って耐えるなんて馬鹿げた行為が出来ないだけだ。

医者に……外科医になったのはせつかく母さんがあそこまで大きくした病院に、

後を継ぐ人間が必要だと思ったからだよ」

「そう」

静かに頷いて晶子は立ち上がり、リビングダイニングの片隅に置かれた本棚から

古びた革表紙の冊子をとってきた。

「お父さんの日記、実家をいくら探してもないと思っていたらあんたが持っていたのね」

「……」

姉がこの日記の存在を知っていた事に驚きながらも何も言えない片に、

晶子は仄かな苦笑を向ける。

「おぼろげな記憶だったけど、さっきこれを見てはつきりと思い出したわ。

お父さんはよく夜遅く書斎の机でこれに万年筆をはしらせてた」と懐かしげに晶子は革表紙をなでる。片は怖々と尋ねた。

「中を、読んだことはある？」

「ないよ」

晶子は小さく首を振る。

「人の日記なんて読むもんやないやろう。それに私はあの時、一人で東京に残っていたから

あの村で何があつて、お父さんがどうして自死を選んだか、判らないし知りたくもないんよ。

真実を知った所で、もう過去は替えられないんやから」

「そうか」

今度は片が頷いて、晶子の手元から日記帳を引き寄せる。

二年前、医師国家試験に合格した時破り捨てようとしたために、ほんの少しであるが装丁が歪んでしまっている。それを姉が気付いたかどうか。

「丈一郎が違う、言うんならそれでいいんやけどな。面従腹背って言葉があるように

一人前になるまでは納得できない事には目をつぶって、気にいらない事は受け流すっていう

技術も必要や。あんたは変な所で不器用やから難しいやろうけど、技術は日進月歩でも

それを使う人間の心は化石。あんたが飛び込んだ世界はそう言う所なんやから」

「判っているよ姉さん。俺もそこまで馬鹿じゃない。派遣先の病院では猫を被って

一刻も早く島流しが解けるようにするさ。

そして、研修期間が終わったら日本に見切りをつけるって選択肢もあるし」

努めて明るく答える片に、しかし晶子は不安げな表情を変えようとはしなかった。

「……限界やと思ったら、やめてもいいんやで。病院には私がおるし、

あんたが別の道を進みたいと言うても、母さんは喜んで賛成してく

れるとおもうわ」

「姉さんには、大阪の支院があるじゃないか。関西進出は母さんの念願だったんだろう。」

それになって二年だけど、俺は医者という仕事が好きなんだ」

「そう、ならさっきも言ったけどもう少し鈍感で器用になり。」

……でもあんたが思ったより元気そうで安心したわ」

やっと再び笑顔を見せると、晶子はごちそうさまと軽く一礼して立ち上がった。

「帰るの？」

手早く荷物をまとめながら、晶子は頷く。

「今から駅に行けば最終の新幹線に間に合う。明日朝から手術が三件はいってるんよ」

「じゃあ駅まで送るよ」

「飲酒運転はあかんよ。そこらへんでタクシー拾うから気にせんで」小走りで玄関に向かいながら晶子は言った。

「あ、そうそう。来年の正月には実家に帰ってくるんやで」

今日のお返しに灘の生一本用意しとくから。じゃ、体気をつけて」靴を履きながら、最後に早口で告げると、来た時と同じように姉はあわただしく去って行った。

空になった二人分の食器と一緒に部屋に残された片は、日記帳を触りながらポツリとつぶやく。

「泊まりの予定なんて見え透いた嘘、つくなよ」

忙しい時間を割いて自分の様子を見に来てくれた姉に感謝しつつも、ほんの僅かでも規格外のことが起こると疾風の速さで話が伝わるこの世界に、

改めて嫌悪感を覚えた。

外見上は強固、堅牢を装いながら、内部には不満と矛盾が渦巻き、隙あらばお互いの足を引っ張り合おうと虎視眈々とお互いを監視し合っている。

そしてそれを指摘し、改善しようとする者に対しては賞賛ではなく

懲罰をもって報いる。

これが二年間かけて片が学んだ彼が生きていこうとする世界の真実だ。

ずっしりとした疲労が両肩にのしかかるのを感じながら、片は二年ぶりに日記帳を開く。

開いたページは十六年前の春の日付が記されている。そこから後は空白のページだ。

「私の死が、多くの医師とそれが必要としてくれる人達に何かを考えさせ、

気付かせてくれる事が最後の願いだ」

父が最後に記した文章には、赤い二重線が小刻みに震えながら引かれている。

これを引いたのは、多分父ではないだろう。

「願いは、叶いそうにないよ。父さん」

片の呟きに、答えなど無論返ってくるはずがなかった。

※

「やあ、よく来てくれたね。僕は小鉢瑠架。肩書きは救急科長だけど、

実はまだこの病院に来て二年目でスタッフの別当医師の方が勤務歴は長いんだ。

君の優秀さは田村教授から窺っているよ。短い期間だがよろしく頼む」

一週間後、坪内総合病院に初出勤した片は、科長と名乗る医師の愛想のよい挨拶に軽く面食らった。

大学病院では、なんであれ長と肩書きがつく人間は例外なく研修医に高圧的だったからだ。

今片の目の前で笑いながら立っている医師は、一つの科を任される立場にしては随分と若く

そして、黒髪黒瞳でありながらエキゾチックな雰囲気を感じさせる不思議な容姿をしていた。

「実は祖父がクロアチア人でね。こんな顔立ちに生まれついた。ええと」

「片です、片丈一郎。外科の二年目の研修医です」

慌てて自己紹介をした片に、小鉢がおやという表情になる。

「片……というともしかして」

ほら、おいでなすったと片は心の内で軽く苦笑する。

佐藤や鈴木という平凡な姓がこういう時は本当にうらやましい。

「片美容整形外科の院長は、俺の母ですよ」

こういう氏素性はさっさと白状しておくに限る。黙っているとあとでばれた時にいつまでも

ちくちくと嫌味を言われるという前例を片は大学病院で嫌と言うほど味わっていた。

「そうか、じゃあ片敬一郎先生はお父上なんだな。人道主義の立派な先生だった。」

夭折されたのが本当におしまれる」

小鉢が喋る言葉一つ一つが、片の心の奥底に不快に響く。

人が語る父は、いつ惜しまれつつ夭折した人道主義の立派な医師。それだけだ。

その父がなぜ夭折したのか。その理由を推し量る者など誰もいない。

「お母上の噂もよく耳にしているよ」

黙ったままの片に小鉢は喋り続ける。

「儲け第一で、エステと区別がつかないようなド派手な広告を所構わず垂れ流し、

金持ちの顧客をあの手この手の美容施術で囲い込み、一方では優秀な医師を方々から

札束で横っ面をひっぱたくようなやり方で引き抜く、と言う噂ですか？」

今度は小鉢が面食らったような表情で黙りこむ。

まさか息子の口から、母を誹謗中傷するような言葉が出てくるとは想像もしなかったのだろう。

「まあ、大分誇張されていますが事実には違いありませんから。

どこの世界でも目立つ者は叩かれますからね」

自嘲的な笑みを浮かべながら喋り続ける片に、小鉢はうん、とかまあとか曖昧な返事をして

「スタッフの紹介をしたいからついて来て」

と言ったつきり後は黙り込んでしまった。

こいつも同じか。と後について歩きながら、片は心の中で吐き捨てる。

裏でこそ陰口を叩きながらも、面と向かっては愛想笑いでごまかし続ける。

本当にこの国の医者には碌な人間がない。

すでに片の頭の中からは、姉の忠告など跡かたもなく消え失せていた。

続く

第二話

「よう、片。少しはこの病院に慣れたか」

病院の廊下で問いかけと共にいささか強く背中を叩かれ、片は顔をしかめながら

後ろを振り返る。そこには彼より頭一つ背の高い別当医師が豪快な笑みを浮かべていた。

全てがおおぶりに作られている彼の眼鼻立ちは、真面目な表情をしていると子供ならば

後ずさりしてしまいそうなほど厳めしいものだが

一反破顔するとなんとも愛きょうたっぷりな顔つきになる。

「ええ、まあなんとか」

「ふんふん、初日に気絶した時はどうなる事かと思ったが」

にやにやと笑い続ける別当医師から、片は不覚にも頬を赤らめて顔を背けた。

彼は本来整形外科が専門なのだが、本人いわく「人手が足りないと院長に泣きつかれて」

1年の約束で救急科の方に出張中らしい。

「どうやら耐性はついたらしいな」

もう一度片の背中をぼんと別当に叩かれ、片は痛みと恥ずかしさがないまぜになった何とも言えない表情になった。

思い出したくもない話だが、勤務初日歓楽街として

全国的にも有名な猿若町から腹部にかなり深い切創をおった患者が運び込まれてきた。

日雇いのような条件で働いていたその患者は無論保険証もなく、ここに担ぎ込まれるまでかなりの日数市販の薬で痛みをごまかしながら、我慢していたらしい。

赤黒く変色し異臭すら放つ包帯を切り裂くと、

膿み腫れた傷口から米粒のようなものがぼろぼろと落ちてきた。

何だろうと手でつまみあげ、ウジ虫だと判った瞬間で片の記憶は途切れている。

実は子供のころから「虫」と名のつくものは

それが美しい蝶であれ、子供達に人気のカブトムシであれ大の苦手なのだ。

知らなかったとはいえ虫、しかも腐肉にたかるようなグロテスク極まりないそれを

薄いビニル手袋ごしにつまみ上げてしまった衝撃に、神経の何処かがショートしたらしい。

次に目を開けた時片は宿直室の狭苦しいベッドに寝かされ、呆れかえった表情の別当医師に覗きこまれていた。

「こんな役立たずのひよっこをよこしやがって、白鳳大学は何を考えているんだ」

独り言のように呟かれた言葉は、今でもぐっさりと片の胸の中に五寸釘のように突き刺さっている。

が、失敗にいつまでも落ち込んでいるようなやわな神経の持ち主なら、

そもそもこんな所に派遣されてはいない。

翌日から片は、別当医師や看護師たちの冷やかさが7割ほど増したような視線や、

「気絶する時は処置室から出てからにしてくださいね」

という皮肉を何も感じない風を装って受け流し、黙々と勤務に励んだ。

医師と言ってもまだ研修中の身分で経験の浅い片の主な仕事は、患者を運んできた救急隊員から症状や現在の状態を出来る限り詳しく聞きだし、

自らも患者の診たてをおこない、それを処置室で待ち構える小鉢医師らに正確に伝える事である。

その要領とコツさえ呑み込んでしまえばその他、縫合のアシスト等の雑務は、

彼を嫌っていた教授すら「優秀」と認めざるを得なかった片にとつては

お手のもので、着任して20日を過ぎた今、

初日に失った信頼は別当医師に「慣れてきたな」と言われるほど回復してきた。

「今何をやっていた？」

「昨日運ばれてきた交通事故にあわれた患者さんの容体が安定してきたので

救急科ICUから外科の一般病棟に移し、その引き継ぎをしてきたところですよ。

しかし、別当先生」

「どうした？」

笑顔を収め、怪訝そうな顔で問い返してきた別当に、片はここに来て以来ずっと疑問に思っていたことを尋ねる。

「あの患者さんは外傷位置は頭部でした。これは普通三次救急の領分ではないのですか」

「建前はな」

と別当は今度は厚い唇に苦笑の影を刻む。

この国の救急医療は一次、二次、三次と別れている。

ドラマで有名なアメリカのERのように歩いてくる患者から、

CPA（心肺停止）状態の患者まで一手に引き受けるというわけではないのだ。

ちなみに一次救急は「夜間、休日診療」などであり、

二次救急は入院を必要とする重症患者を、そして

救急救命の最後の砦と呼ばれる三次救急は、二次救急では対応できない

多発性外傷、頭部外傷重度心筋梗塞や脳疾患などを扱う。

「この病院は私立で、脳外科はないが人間ドック用に

MRIやCTなどの診断機器だけは充実しているからな。

診察だけという条件で引き受ける場合が多いのさ。

まあそのうちの9割がそのまま受け入れになるがな。

なにせ白鳳大学救急救命センターは、10回中3回は受け入れ拒否をして下さるからな」

ああなるほど、と片は頷いた。同じ病院内で働きながら医局が違ふ為あまりよく知らないのだが、

一度たまたま救命センターで研修中の大学の同期と

大学病院の職員食堂で相席になった時

「今度教授になった先生が、異常なまでの慎重派でさ。

しかも梅林大学の割り箸事件が裁判になっただろう。

それでさらに慎重に拍車がかかって、めんどくさそうな患者は断れ
っていいだして

現場はいい迷惑だよ」と愚痴っていたのを思い出した。

梅林大学の割り箸事件とは、夏祭りで綿あめを啜えたまま

転倒した男子児童の喉の奥に割り箸が折れて突き刺さっていたのだが
運ばれた梅林大学高度救急医療センターで、診察した医師がその旨
を説明されず、一通り

検査をしたが異常がなかった為喉奥に軟膏を塗っただけで治療を終
え、

帰宅後男子が死亡した一件である。

司法解剖した時に、初めて小脳に長さ7.6センチの割り箸が

突き刺さっている事が発見されたのだが

遺族は医師の過失だと民事裁判を起こし、

マスコミも大体的にこれを報じ、医師のバッシングを繰り広げた。

「大体俺たちだって全力は尽くすが万能じゃない。

どれほど注意を払っても過失が絶対にならないとは言いきれないんだ。
その度に訴えられちゃたまないよ」

当直続きなのか目の下にどす黒いクマを作った同期は、

そう言って力なく笑うと半分以上中身が残ったままの

食器がのったトレイを持って足を引きずりながら去って行った。

「……で、誰なんだ片」

「え？」

「だからうちから出した患者を引き受けてくれた担当医師は誰なんだ？」

物思いの淵に沈んでいた片がその問いに我に帰ると、目の前にいぶかしげな表情をした別当医師の顔があった。

「す、すいません。小鉢医師です、あの、女性の」

この病院には外科にも小鉢という名字の医師がいる。

栗色がかった長い髪にソバージュに近いきついパーマをかけた中々の美人だが、

その表情にはいつも寂しげな影がおちていてそれが片には気にかかっていた。

「ああ、絵里子さんか、なら安心だな。旦那より数十倍丁寧な治療をする」

「……小鉢先生の奥さんなんですか」

「そうだ、知らなかったのか？」

「ええ」

同じ病院に夫婦で医師として勤める事は、珍しくはあるが皆無ではない。

だが、何度か救急科の方に女性の方の小鉢医師がやってきた時、科長の小鉢は酷くそっけない態度だった。

それは仕事にプライベートを持ちこまないようにという配慮というより、

出来る限り彼女と顔を合わせたくないという心の現れのようにであり、小鉢という姓もまた珍しい事もあって、片は仲の良くない兄妹かと思っていたのだ。

「彼女の専門は消化器官だ。機会があったら一度手術を見学させてもらえ。」

多分大学病院にも中々お目にかかれないレベルの手技が間近で見られる」

なぜか得意げに言う別当に片ははあ、と曖昧な返事を返して救急科

医師控室のドアをくぐった。

「やあ、御苦労さん。患者さんの引き継ぎは」

「はい、滞りなく。小鉢絵里子先生が担当になるそうです」

柔和な笑みを向けてきた小鉢医師に、片は今やってきた業務の報告をする。

女医の名を聞いた時、小鉢の顔がほんの一瞬強張ったような気がするの。

気のせいだったろうか。

「そうか、絵里……いや小鉢先生が引き受けてくれるなら問題はないな。

じゃあ片君急患が来ないうちに夕方の回診をやってしまおうか。ついて来て」

と立ち上がった小鉢の後ろに片は続く。

救急科に置かれたベットは15床。その大半がICUの中にある。

ベッドの周りに置かれた様々な機械が規則正しい電子音を響かせ、看護師達がきびきびとした足取りでそれらをチェックしている中、

二人の医師は患者達の順番に診ていく。

小鉢は常に柔和な笑顔を絶やすことなく、喋る事が出来る患者からは丁寧に容体を聞き、意識がなかったり、

人工呼吸器に繋がれている患者には励ますように何かを耳元で

囁きながら手を握ったり、体をさすったりしている。

その献身的な様子を見てみると心の中に微かな苛立ちが沸き起こるのを片は感じた。

部屋の半ばまで来た時、片の耳に微かな泣声が聞こえた。

外界と隔てられたICUの中のさらにたった一つの個室からそれは聞こえてくる。

アイボリーに塗られた扉で区切られたそこは特別室と言う名前があるのだが、

職員達は皆へブズドアと呼ぶ。

そこに入れられるのはもう手の施しようがなく、

命が尽きるのが時間の問題という患者達。

最後の時間を家族水入らずで過ごせるようにと言う病院側の配慮だ。だから、普通は10分が限度の面会時間が、この部屋に限っては無制限なのだ。

当然この部屋の回診はなしだと片は思っていた。

この中にいる患者に医師が出来ることはもう何もない。

だが、小鉢は当然のように部屋に入るとすでに意識のない患者と、枕元に座る憔悴しきった家族両方に何事か囁きかける。

そして小鉢医師が患者の手をそっと握ると、感極まったらしい家族がわっと泣き出す。

その様子をじっと見ていた片はますます苛立ちが募った。こんなことをして何になる。

自分たちの仕事は患者の治療であり、慰めを与えることではない。死を待つばかりの患者の前での

醜悪な猿芝居、自己満足の極みじゃないか。

「ふむ、特に急変しそうな患者もいないな。片君御苦労さん今日は上がっているよ」

「先生、俺は当直の回数をもう少し増やしてもかまいませんが」
再び医師控室に戻り、本日の業務終了を告げられた片は小鉢にそう申し出る。

戦場と例えられる職場。しかも地方都市でありながら日本屈指と揶揄されるほどの歓楽街

猿若町をカバーしているので、夜間であっても救急車が到着しない日はない。

片は最悪月10日以上の上直を覚悟していたのだが、今までの上直日数は大学病院で働いている頃より少ないくらいだ。

「いや、片君はまだここに来て日も浅い。今でも十分役に立っているのだから

もう少し慣れるまで今のままでいいよ」

普通通なら喜ぶべき小鉢医師の返事は、しかし余計に片を苛立たせる。

片が着任してから今日まで、目の前の医師が家に帰ったのは僅かに五回。

殆どの夜を小鉢医師は病院で過ごしていて、

宿直室のベッドの内の一つは彼の私物が山積みになっている。

トップでありながら率先して宿直を引き受け、

患者はもちろんの事下っ端の研修医にすら氣を使う理想的な上司であり、医者。

……ふざけるな……

片は胸中で吐き捨てた。小鉢医師は既婚者だ。

それなのに家よりも病院で夜を過ごす事が多いと言う事は家族と不仲であるか、自分の理想とする医療にのめり込むあまり家族を顧みていないかのどちらかだ。

外科の小鉢女医の顔にこびりついた寂寞の影を見る限り、科長は後者のタイプなのだろうか。

自分の憶測に、ますます小鉢医師への苛立ちが募る。

すでにそれは怒りといってもいいレベルに達していた。

「どうしたんだい？ 怖い顔をして。何か氣になる患者さんでもいるのかい？」

不思議そうに小鉢に問いかけられて、片は慌てて首を振る。

いくらなんでも憶測で目の前の医師に文句を言うわけにもいかなかったが、お疲れさまでしたと控室を後にしても苛立ちが消えない。

更衣室で乱暴な動作で白衣を脱ぎ、青いER着からスーツに着替え険しい表情のまま

再び外に出ると、隣の女子更衣室から出てきた市川看護師と鉢合わせした。

看護学校を今年出たばかりの彼女は、

救急科に配属されている職員の中では最も片と年が近く

同じ新米同士ということで、もっとも気安い間柄だった。

「あれ、小鉢先生今日は当直じゃないんですか」

「ああ、明後日までないよ」

今時珍しい手入れされた肩までのまっすぐな黒髪をさらさらと揺らし、

屈託なく問いかける彼女に片は無愛想に返事をする。

「そうなんですか。じゃあ今日も小鉢先生一人で当直ですか。

えらいですね、科長自ら。

中々出来ることじゃないです」

市川の口調も表情も小鉢に対する尊敬と感心に満ち溢れている。

「そうでもないぜ」

え、と驚いた市川に、片は意地わるい笑みを向ける。

「小鉢先生は傍から見ればそりゃあ理想的な医者だろうよ。賞賛を一身に浴びて

本人も嬉しいだろう。だけどそれを支えてる人間はたまったもんじやないぜ」

「支えているって」

怪訝な顔をして問い返す市川に、片はさらに喋り続ける。

「たとえば家族。めったに家に帰ってこない夫や父親なんて何の存在価値があるんだ。

それに、トップがそんなにしゃかりきに頑張っていちゃあ部下だって、帰りにくいし

休みだって取りにくい。結局みんなが限界を超えて頑張る続け、いつかは共倒れだ。

と、言うわけで俺は小鉢医師が自己犠牲に陶醉している独善的な奴にしか見えないよ」

途中から、この新米看護師にここまで言う必要はない、八あたりだと心の片隅で己の声で

警告が上がったが、一度迸り出た言葉と感情は今更止めることはできなかった。

「そんな、片先生。そこまで言う事は、ないじゃないですか」

小鉢の代わりに片の苛立ちの砲火を浴びて眦に涙すら浮かべ、立ち
つくす市川看護師に
片は後味の悪い思いを抱えながらも、今更かける言葉もなく足早に
その場を立ち去った。

続く

第三話

「もう決めたって、子供達の学校はどうするんですか。晶子は今年受験なのに」

「何もついて来いに行っている訳じゃない。私一人が行けばいい事だ」

「何でそんなに軽々しく……貴方はいつもそうやって何でも一人で決めてしまうんですから。こんな山奥……」

「誰かが行かなければならないのなら、私が行くしかないだろう」
「言いあっている父と母。姿は見えないがその口調から二人が怒っている事は判った。」

「どうしたの、こんな時間にトイレ？」

後ろから囁きかけられて、びっくりして振り返るとそこには姉がたっていた。

「ううん、声が聞こえたから気になって下りてきた。」

「どうしたんだろう。お父さん、お母さん」

「さあねえ」

困ったように呟いて、姉は自分の肩をそっと叩いた。

「たまには喧嘩する事もあるでしょう。」

夫婦だっていつも仲よしってわけじゃないんだから。

心配しないで寝なさい。午前二時は小学生が起きている時間じゃないよ」

その言葉に頷いてベッドに戻ったものの、

眠気はなかなか訪れてくれず翌朝ぼうつとした頭を抱えて一階のリビングに下りると、

目の周りを赤く腫らした母親がいつものように

ミルク入りの紅茶を持ってきてくれた。

「ねえ、丈一郎。お父さんのお仕事の都合で

学校が変わることになるかもしれないけど、大丈夫よね。」

新しい学校は自然がいっぱいある所だし、お友達だって……」

「いっちゃだめだ!!」

目を見開いて固まる母親。それに向かって自分はもう一度叫ぶ

「いっちゃだめだ!!」

夢の中の自分の叫び声で、片は目を覚ました。

鈍く痛む頭に顔をしかめながらソファから起き上がると、ネクタイを取っただけの

ワイシャツ姿で眠っていた事に気がつく。

なぜだと、しばらく痛みのせいでぼんやりとする頭で考えていたが、テーブルの上に乗った中身が殆どなくなったボンベイサファイアの瓶と、

チーズの欠片がこびりついた皿を見て

年下の、しかも女性である市川看護師に八あたりした罪悪感から、昨晩家に帰ってからやけ酒と言うにふさわしい

飲み方をしてそのままソファに寝ころんだ事をようやく思い出した。せっかくの休みなのに二日酔いか、と乾いた笑いがこみあげてくる。胸の奥のざわざわとした苛立ちも、少しも静まっていなかった。

昨日帰った時は明日こそ部屋の掃除と思っていたのだが、

今はそんな気力は欠片も残っていない。

結局一時間ほどぼうっとした後、重い体を引きずるようにして浴室に向かう。

シャワーから出る熱い湯を頭から浴びると、少しは身体がしゃんとした。

今日もいい天気のように、窓からは今年初めての入道雲が青い空にそそり立っている。

散らかった家の中にいると余計に気がめいってしまいそうで、片は財布をジーンズの尻ポケットに突っ込むと愛車のカギを片手に家を出た。

目的など特にない。ただ気の向くままにランドクルーザーを走らせていると、

山の方へと続く真新しい国道にでた。

こんな道、何時の間に出来たんだろうと思いつながらも

自分の他にはすれ違う対向車すらまばらで、真新しい道を

独り占めに行っているような子供じみた喜びを感じ、片はアクセルを踏み続けた。

半分ほど開けた窓から、初夏のさわやかな風が吹きこんでそれが胸に巢食った苛立ちを吹き飛ばしてくれるような気がする。

だが、1時間ほど走った所で頭上に現れた案内標識を見たたん、片はぎよっとしてブレーキを踏んだ。

軋むような音をたててランドクルーザーは急停車する。

前方を走る車がいたら確実に追突していただろう。

慌てて車から降り、改めて標識を見上げる。

青地に白色でくっきりと描かれた文字は「仙沢村 30キロ」

「……この道が、あの村に続いているなんて」

手繰り寄せた古い記憶は、酷い車酔いに苦しみながら険しい山道を進んだというもの。

そういえば、前方に道を吸いこむようにそびえ立っている山には微かな見覚えがあった。

あの山を越せば、仙沢村。父が使命感と熱意を持って医師として赴任し、

そして自ら命を絶った場所。

呆然と案内標識を見つめ続けていた片の耳に

激しいクラクションの音が飛び込んできたのは、どれくらいの時が流れたあとか。

「兄ちゃんどうした。車が故障したのか？」

対向車線に止められた車にのった日に焼けた肌をした中年男性が、心配そうな表情で窓から首を突き出してこちらを見つめている。

「い、いえ大丈夫です」

千切れるほどの勢いで首を振ると片は運転席に飛び乗り、かなり強引なハンドル操作で車をUターンさせた。

「危ないなあ、そのうち事故るぞ!!」
中年男性の呆れた顔と声から逃げるように、片は思い切りアクセルを踏んだ。

※

「どうしたの、片君。久しぶりに来たと思ったらそんな真っ青な顔して。まるで幽霊でも見たみたいだ」
驚いた顔をするマスターに、片はそんなようなもんだ。
と独り言のように口の中で呟くとカウンターの一番端の席に崩れるように腰を下ろした。

白鳳大学近くの古びた喫茶店。四半世紀近く
医学生や職員たちのたまり場であったそこに片もまた、学生時代はよくレポートを書く為にコーヒーマグ一杯で随分と長居をしたものだったが、

卒業して以来忙しさも手伝ってとんと御無沙汰だったそこに、片は追われたものが助けを求めるように飛び込んだのだった。

「まあ、まずこれ飲んで落ち着きな」

マスターが手渡してくれたお冷を一気に飲み干してから、片は初めて喉が焼けつくほど乾いていたことに気付く。

「本当にどうしたんだい？まさか手術で失敗して人を殺しちゃったとかじゃないよな」

笑えない冗談を口にするマスターに、片は引きつった笑みを向ける。
まだ手術ミスなどしたことないが、

受けたショックの度合いは同じような物かもしれない

「そんなんじゃないよ。悪いけど最新版の道路地図があったら見せてくれないかな」

マスターは頷いて、ミルクだけをつけたアイスコーヒーと一緒に大判で分厚い本を渡してくれる。

この店では常連にいちいち注文を聞いたりはない。

「ああ、その道は去年出来たんだ。お陰で仙沢村へ行く時間が前の半分以上になったよ」

開いたページを覗きこんだマスターの言葉に、片は

「仙沢村にいったことあるんですか」

と尋ねた。

「ああ、あの村に流れている川に絶好のアユ釣りのポイントがあるんだ。

昔は行くだけで半日近くかかったけどね」

「あそこに今、病院がありますか？」

うーんとマスターは首を傾げた。

「どうだったかなあ。私は釣りが目的だから

、村には食料や氷を買う為に立ち寄るだけだけど、なかったんじゃないかなあ。

年寄りが殆どの寂れた村だし」

そうですか、と片は頷いてぐしやりと髪の中に手を突っ込んだ。

8年前、白鳳大学に合格した時」

仙沢村と同じ県内の大学で本当にいいのか」と最後まで母親は気にかけていた。

それに「県内言っても遠く離れた場所だから大丈夫」と答えた自分の後頭部を

思い切り殴りつけた気分だ。

年月がたてばこの国の道路事情はたいてい、よくなる。

マスターの言う通りあそこに病院がなかったとしたら、

村人が坪内総合病院まで来院してくることは十分に考えられる話だ。十年以上の年月がたっているのもうあった所でお互いの事などわかりっこないが

それでも、あの一帯の独特の訛りがある喋り方を聞けば、

自分はきつと忘れようと努力してきた仙沢村で過ごした日々を思い出してしまうだろう。

「後、半年か」

マップ帳を閉じて片は呻くように呟いた。後半年経てば二年の研修期間が終了する。

そうしたら、この市、いや県からとっとと出ていこう。

そう自分に言い聞かせると、動揺しきっていた心中が少しづつ落ち着いてきた。

「本当に大丈夫かい？」

尚も心配そうなマスターに片は先ほどもましな笑顔を向けて頷いてマップを返すと、

代わりにマガジンラックから医療専門誌を取ってくる。

特に読みたい記事があるわけでもなかったが、

今はなんでもいっからあの村以外の事を考えられる材料が欲しかった。

ばらばらとページをめくっていると、

整然と印刷された文字の中から突如現れたたどたどしい手書きの文字が

目に飛び込んできた。

どうやら表紙に書かれている「子供のPTSDの症例とその治療」という特集記事の

資料らしい。脇に小さくH大震災を経験した小学生児童の手記と書かれていた。

二年前の冬、関西の港街でおこったM7.8の大震災は多量の死者を出し、

日本の高速道路の安全神話を崩壊させ、そしてPTSDという新しい病名を国民に浸透させた。

『その時僕は、国立病院の官舎に住んでいました。』

地震で家がめちゃくちゃになってお父さん、お母さんと避難所に行くことになりました。隣の家の小鉢君にも

「一緒に行こう」と言いましたが、小鉢君は「お父さんと約束したから

ここにいる」と言って妹と官舎に残りました。

そして、余震で崩れた壁の下敷きになって死んでしまいました。もしあの時、僕がもう少しつこく誘っていたら、

小鉢君は死ななくて済んだかもしれません。その事を考えると心臓がどきどきして、よく眠れなくなります』

「……小鉢」

その中に上司と同じ名前を見つけてどきりとする。単なる偶然か、それとも……。

何故かは判らないが、真相を確かめたいという欲求が沸き起こった。

「御馳走様」

アイスコーヒーを一気に飲み干して、

ポカンとするマスターの前に小鉢を置いて店をでる。

向かった先は大学の図書館だ。

学生や大学病院に勤務する研修医の為にここは基本日曜日でも空いている。

片は身分証と引き換えにカウンターからログインカードを受け取る
と、

閲覧室の片隅に並んだパソコンの前に腰を下ろした。

ログインカードを差し込むと、微かな電子音と共にインターネットが接続される。

何度か語句検索を繰り返し、片はようやく自分が求めていたものを探し当てた。

震災で負傷した多くの人々の命を助けた勤務医を賞賛する、二年前の新聞記事。

「そういう、ことかよ」

記事を読み終えて、片は呟く。

その頃には危うくあの村への道をたどりそうになった
驚きと動揺はいつのまにか消え去り、

代わりに彼の心を塗りつぶしていたのは、

柔和な表情を絶やさない献身的な勤務を続ける

救急外来科長に対する今まで以上の怒りに酷似した反発心だった。

続く

第四話

「片君、内科病棟に入院予定だった例の患者さんはどうした？病棟の方から早く移動してきてほしいと催促が来ているんだが」

「ああ、あれですか？」

小鉢科長の問いに、片はかつて所属していた医局のトップ、田村教授に向けたのと同じ

嘲るような薄笑いを浮かべて答える。

片が仙沢村への道をたどりかけた休日から7日が過ぎた、

「入院は中止になりました」

「中止になった？どういう事だ」

朝八時半の坪内総合病院救急外来科医局。

共に当直明けの医師二人は寝不足による

疲労がこびりついた顔を突き合わせていた。

ええ、と片は頷いて小鉢医師を睨みつけたまま、

出来の悪い生徒にことさら丁寧に説明をする教師のような口調で話を続ける。

「患者は肺気腫によるCOPD（慢性呼吸不全）で

白鳳大学病院がかかりつけだったにもかかわらず

その救急救命センターは受け入れを断った。

救急隊が現場到着時、患者はCPA（心肺停止）状態、

救急隊によりCPR（心肺蘇生）を受けながら当院に到着」

「そしてエプネフリンを投与しながらCPRを続行し、

患者は心肺回復が見られたが自発呼吸微弱の為

気管内挿管し、酸素を流しつつジャクソリリースにて

用手換気実施。その間内科の方では

レスピーター（人工呼吸器）を用意して患者の受け入れ態勢を整えた」

横柄な口調で昨日の深夜搬送されてきた

患者の容態や治療内容を語り続ける研修医に

流石に苛立ちの表情を浮かべた小鉢がその言葉を途中から引き継ぐ。

「そこまではいい。僕は片君より年上だが

数時間前に行った治療内容を忘れるほど

もうろくはしていないつもりだ。

なぜ入院が中止なんだ。患者はどこに行った」

「白鳳大学病院です」

「はい？」

ぽかんとした表情で聞き返した小鉢に、

片は馬鹿にしたようなため息をつきながら

もう一度同じ言葉を繰り返す。

「救急救命センターに大学の同期が研修中なんです。

昨日は丁度当直だったようで

明けがた大学病院へ電話したらそいつが出たんから、

自分の所の患者はそっちで引き受けろと怒鳴りつけたんですよ。

担当医が不在だとか散々渋ってましたが、蘇生したと伝えたら

掌を返したように受け入れを承諾しました。

患者の家族もかかりつけの病院への入院を希望していたので、

救急車を呼んで俺が付き添って用手換気をしながら大学病院へ

再搬送をしたんです」

「……誰の許可を得てそれを行った」

小鉢医師の口調に怒りが籠った。だが、それでも片の薄笑いは消え

ない。

「おや、俺は報告しましたよ。ただ、科長は大変お疲れだったようで

宿直室のベッドに横になったまま目も開けようとなさいませんでしたし

たが」

「おい、それは本当か片」

口を挟んだのは、二人が言いあっている最中に

医局に戻ってきた別当医師だ。

「お前確か俺に小鉢科長の許可を得たといったな。嘘をついたのか」

「嘘じゃありませんよ、よろしいですかと尋ねた時に科長は確かに頷いておられました。

ただ、俺の言葉になのか、御自身がご覧になった夢なのにかは判りませんがね」

「片、それは嘘をついたのと同じだ。

研修医の分際で勝手に患者を転院させるなんて思い上りにもほどがある」

「思い上り？俺は最善の方法を取ったまでです」

片は微塵もひるむことなく言い返す。

「この一件で誰が損をしたんですか。

俺達は患者を助け、大学病院に貸しを作った

家族と患者はカルテもあり、病状も把握しているかかりつけ医に診てもらえて安心できる。

内科病棟もめんどくさいレスピエーターの管理をしなくて済む。

強いて言えば、二度

患者を搬送しなければならなかった救急隊がちよっと可哀想だったかな」

「そう言う問題か。貴様」

ついに激高した別当が片の白衣の襟元を掴む。

ばん、と鈍い音が狭い医局いっばいに響き渡った。

「やめたまえ、二人共」

掌を思い切りスチールの机に叩きつけて、二人の動きを止めた小鉢医師は

片が初めて見る厳しい表情で再度口を開く。

「片君、搬送中患者の容態は安定していたのか？」

「もちろんです。そして白鳳大学到着後すぐにICUに入れられ、レスピエーターを挿入されました」

よどみない片の答えに小鉢は頷いた。

「ならばいい、この一件はこれで終わりだ」

「おい、小鉢。いいのかそれで」

不服そうな別当医師を宥めるように小鉢医師は

「片君の言うとおり、この件で被害をこうむった人間は誰もいない。それに片君の報告に気付かず眠っていた僕にも責任はある」と説明を続けた。それに不承不承別当医師は頷く。

「科長がそれでいいと言うのなら、俺はもう何も言えないのだがな、いくら最善の方法とはいえルールを無視して勝手な暴走を続けるような奴と一緒に仕事をするのは俺はごめんこうむりたいね。さっさと白鳳大学に連絡してこのくそ生意気なひよっこを回収して有能でなくていいからチームワークを乱さん医師を改めて派遣してもらってくれ」

足音も荒く別当医師が医局から退出すると、小鉢はため息をついて改めて片の方に向き直った。

「どうして、起こさなかった」

「起こしましたよ、何度もね。だけど科長は起きてくださらなかった。

まあ、三日連続で当直なんて無茶をやっていたら当然だと思いますが」

片の指摘に小鉢の顔に苦渋の色が広がる。

どうやら痛いところをつかれたらしい。

その様子を見た片の心の奥底に、昏い喜びがジワリと広がった。

「御自身の体力に自信があるのは結構なことだと思いますが、あまり過信なさるのもどうかと思います。これが患者搬送ではなく急変だったらどうなっていた事やら」

「……以後注意する」

しばしの沈黙の後、絞り出すような声でそう言った小鉢医師に片はそう願います。とそっけなく答えて医局を出た。

とたんに突き刺さってくる幾つもの攻撃的な視線。

朝の申し送りを終えたらしい、白衣姿の女性達は視線以上に冷たい表情を数十秒片に無言で向けた後、一斉にまた業務に戻る。

……看護師達を、敵に回したか……

苦笑と自嘲がないまぜになったような複雑な笑みをリノリウムの床に向け

片は心中で呟く。看護師に高圧的な態度を取る医師達も多い中、誰に対しても物腰柔らかで優しい小鉢科長が彼女たちに人気があるのは、

今までの勤務で判っていた。

そんな彼にたてつくような真似をしたのだから、当然と言えば当然なのだが

無論心楽しいわけではない。

……まあ、いいさ……

どうせ仮の職場だ。それに自分は間違った事をしているわけではないのだ。と片は思う。

七日前、インターネットで見つけた記事から推測すると、小鉢がここまで献身的に勤務に打ち込んで

いるのは患者の為でも医療従事者としての使命感からでもない。

自分の過去を忘れたくて仕事に逃げ込んでいるだけだ。

……かつての父親と同じように。

小鉢医師には現実を突き付ける必要がある。

手前勝手な自己満足の行きつく先は周囲を巻き込んでの自滅しかないのだから。

ふと新たな視線を感じて片が顔を上げると、こちらを見つめる市川看護師と目があった。

他の看護師のような冷酷な無表情ではなく、

怒っているような泣いているような複雑な顔をした

彼女に思わず苦笑を返した瞬間、

市川はプイと顔を背けて業務に戻ってしまふ。

受け取り手を失った笑みは、

片の心にやけどのようなひりついた痛みを残した。

※

「ふーん、君が片君だったのか」

ふいに背後から聞こえた声に片が振り返ると、

ソバージュに近いきついパーマをかけた髪を無造作に首筋の後ろで一つにくくった女性がまるで珍しい動物を見るような眼つきでこちらを見つめていた。独断で患者を

白鳳大学病院に搬送した一件から三日が過ぎた。

その間に生意気で傲慢な研修医の噂は病院中に広まり、

職場は無論のこと職員用食堂などの公共スペースもかなり居づらいものとなって、

片は探し回った挙句休憩時間のほとんどを

人気ない屋上のベンチに座って過ごすようになっていた。

「小鉢先生」

「いい、隣？」

片が返事をする前に小鉢女医はさっさと彼の隣に腰を下ろすと、白衣のポケットから取り出した煙草を咥えて火をつける。

薄荷のような匂いが片をふわりとまとわりついた。

「瑠架とやり合ったんだって？」

怪訝そうな顔をした片に、女医はああと苦笑を浮かべる。

「君の所の科長の名前。君も珍しいね、

瑠架に感心する人はいても反発する人なんてめったにいないのに」

「そうですか」

そっけなく答えながら、片はこの女医がやってきた理由を考える。まさか夫にたてついた研修医に

説教をしにきた訳じゃないだろうな。

「そんなに警戒しないでよ、別に文句を言いに来たわけじゃないから」

もう一度苦笑して、顔の前で片手をひらひらとふった小鉢女医に、

片はじゃあ、何の用ですかと問い返した。

「晶子ちゃんがいつも気にかけている弟君と一度話をしたかった。それだけよ」

「晶子ちゃんって……姉を知っているんですか」

「私ね、計都医大を出てるの。晶子ちゃんは二年後輩。」

女性で外科医を志す子はそんなに

いなかったから自然と仲良くなったのよね」

「ああ、それで姉さんは坪内総合病院の事をよく知っていたのか」

手こずっていたパズルの解き方をようやく見つけた時のような表情で頷いた片に

小出女医は

「そうね、今でもメールはちよくちよく交換しているわ」と続けた。

「そんな風に見えないけど、君はトップに立たないと満足できないタイプ？」

だとしたら、外科医の世界は経験と実力が大事だからあと十年は我慢しないとね」

「そんなんじゃないです」

片は首を振った。

「俺は唯、科長の仕事への献身ぶりが度を越していると思っただけです。」

まるで何かから逃げたいみたいだ。

本人は満足しているだろうけど、見ていてイライラするんですよ」

「ふうん」

女医は少し意外そうな顔で、紫煙を吐いた。

「放っておけばいいのに、片君は案外お節介なんだ」

「ちがいますよ」

片はさっきよりも激しく首を振る。

「おれは、自己満足のとぼっちはもうこりごりなんです」
そこまで言って片ははっとして口をつぐんだ

「もうこりごりって前に何かあったの？」

「いえ、大したことじゃないです……あの、お子さん方、その御愁傷さまでした」

父の事を喋りたくなくてとっさに口走った言葉に

片は心中で青くなった。

「……知ってるんだ。この病院で誰かから聞いたの？」

ややあってぼつりと返された女医の言葉に、片はおそろおそろ雑誌の件をはなす。人違いだと言われたら謝り倒すしかない。

「そっか、小鉢って名字も珍しいからね」

だが女医はそう言っただけだった。

黙りこんだ女医に、片は思いきってもう一步踏み込んでみる。

「小鉢科長のお気もちは理解できます、でも、悲しみを紛らわすんだったら

他の方法を取った方がいいと、俺は思うんです」

「片君の言う通りかもしれないね」

「じゃあ」

「でも」

再び喋りはじめた片を小鉢女医は遮る。

「人は人を変えられない」

酷く寂しげな顔で彼女は言った。

「瑠架の馬鹿が自分で気付くしかないの。だから片君がもうこれ以上悪人になる必要はない」

「いえ、だから」

片が再び喋りはじめた時、小鉢女医のポケットから電子音が鳴り響いた。

「呼び出されたから、行くわ。ありがとう、話せてよかった。片君はいい子だ」

まるで子供のようなほめられ方をして慥然とした片に小鉢女医は寂しげな表情のまままで笑いかける。

「だからもう、瑠架の事は放っておきな。君の評判が落ちるだけだから」

そう言って踵を返した女医の後ろ姿が消えるまで、片はその場に立ちつくしていた。

「そんなんじゃない」

と口の中で呟きながら

続く

第五話

「若槻消防署ですが、患者の受け入れをお願いします」

救急外来の戦闘開始は、いつも一本の無線電話から始まる。

「患者の性別と年齢、容体を教えてください」

「69歳男性、薬物中毒の疑いです。意識レベルは1-3。

見当障害があるも、かろうじて会話は可能です」

片が受けた電話を背後で聞いていた小鉢科長が

「受けて」

と短く指示を下した。

「了解です、搬送をお願いします」

片は受話器を置くと、小鉢科長が何も言わないうちに医局を出た。

到着した救急車を迎えるのは、研修医の仕事だ。

時刻は一六時三〇分、搬送口の自動ドアをくぐると

外は鮮やかな夕焼けが空一面に広がっていた。

片は迷信深くもないしゲン担ぎなどもしないたちだが、毒々しいま

での

朱色に染め上げられた空を見ると、これから運ばれてくる患者

の運命を

暗示しているようで、重苦しい気分になってくる。

二次救急は、救命救急最後の砦と言われる三次救急ほどではないが

搬送されてくる患者の何割かは治療のいかなく亡くなってしまう。

心電図のモニターに描きだされる波線が平坦な直線となり、小鉢科

長が

治療の終了を告げる。何度経験してもその瞬間は思わず歯ぎしりを

してしまうほど悔しく

逆に止まっていた心臓が動き出し、

三途の川を渡りかけていた患者がこの世に舞い戻ってきた時に感じ

る嬉しさは、

他の何ものにも代えがたい。

大学病院の外科手術が何度も練習を繰り返し、完璧な仕上がりで聴衆に披露されるオーケストラの演奏だとすれば、ここの救急外来は、酒場で演奏されるジャズだ。

基本の譜面はあるが客の様子を見て、

演者は自分の感性で曲を自在にアレンジしていく。

そして、オーケストラの奏者になる予定だった、

自分はいつのまにかジャズに魅せられ始めている。

そこまで考えて、片は苦く笑った。

あと二カ月で去る職場にそんな感情を抱いてどうする。

しかも自分のせいでその雰囲気は最悪になっているというのに。

救急車は中々到着しない。背後で自動ドアの開く音がした。

市川看護師が、首筋の後ろで一つにくくった

美しい黒髪を初夏の風になびかせながら片の隣に立つ。

「……そろそろ、意地を張るのはやめたらどうですか」

呟かれた声はまるで独り言のようで、

片は一瞬それが自分にむけられているとは判らなかった。

黙っていると、市川看護師の声が少し大きくなる。

「このままじゃ、片先生が辛いだけだと思うんです」

片が坪内総合病院に着任してほぼ一カ月がすぎた。

患者を独断で転院させた一件以来、救急外来のスタッフは必要最低限の事以外片と会話を交わす事はない。

片の方も自分の態度を改めようとはせず、相変わらず

事あるごとに小鉢科長に反発しているため、

スタッフの彼への心証は悪化するばかりだ。

早く白鳳大学に戻ってくれないかしら、と

わざと片に聞こえるように呟く看護師まで出るほどである。

「俺は別に意地を張っているつもりはない」

やはり独り言のように、片は答えた。

「それに間違った事をしていとも思っていない」

その言葉に市川看護師が悲しげにため息をつく。その時
朱色に照り輝く世界の中に赤色灯を点滅させた純白の車体が現われ
た。

「おしゃべりは終わりだ」

片は目を細めて近づいてくる救急車を睨みつける。

高揚感が瞬時に全身を駆け巡るのを感じる。

さあ、こいよ。あの世に行きかけている患者さん。

襟首つかんでこの世に引き戻してやる。

救急車が搬送口に横づけになると同時に、後部の扉が開く。

「左右の瞳孔が縮小しているな」

「搬送中より血中酸素濃度低下」

ストレッチャーに乗っているのは白髪頭の男性。

救急隊に助けられながら泣きそうな顔で下りてきた

老婦人も同じ位の年頃だ、多分夫婦だろう。

「到着時、これが患者の脇に転がっていました」

ペンライトで素早く瞳の反射を調べる片に、

救急隊が小さな茶色の瓶を差し出す。

除草剤のラベルが貼られたそれを片は白衣のポケットに突っ込むと、

いくぞ、とストレッチャーを押し始めた。

「血中コリンエステラーゼも大分低下しているな。」

もしもし、聞こえますか。返事をしてください」

処置室に運ばれた患者は速攻で血圧や脈がはかられ、血液検査が行
われる。

待ち構えていた小鉢医師の問いかけに患者は薄目を開け、

はい。とかここはとか、不明瞭な声で返事をする。

腕に巻かれた血圧計が不快なのか外そうとするが、
左手の動きが右手に比べて明らかに鈍い。

「……脳疾患の疑いもあり、か」

「小鉢先生、この患者さんのカルテがありました。
半年前に脳梗塞を起こして白鳳大学病院で手術を

受けた後、こちらにリハビリの為に転院し四か月前に退院されています」

「自宅で転倒していた患者の脇に農薬の瓶が転がっていました。奥さんに聞いたところガーデニング用に購入してまだ封を切っていなかったそうですから、

飲んだ量は瓶を見れば判るでしょう、片先生に渡しておきました」市川看護師と、救急隊員の報告に小鉢は頷くと片に向かって手を伸ばす。

片が黙って手渡した小瓶を小鉢は蛍光灯に透かした。

「ほぼ空だな。飲用量は100mlというところか。有機リン中毒で間違いないだろう

マーゲンチューブで活性炭を強制内服。

バルーンカテーテルも挿入、抹消ルートから輸液開始」

小鉢の指示で白衣の一団が一斉に患者に群がる。

十数分後、患者の口から活性炭が吐き出されたものの容体は大分落ち着きを取り戻した。

「さてこれで諸検査をして、片君、これからこの患者をどう治療する」

小鉢からの問いかけに、片は一瞬考え込む。

その様子を看護師達が手を動かしながら好意的とは程遠い眼差しで見つめている。

「解毒剤としてパム20mlを2アンプル、

時間20mlの速度でシリンジポンプで精密持続点滴。

並行して硫酸アトロピン1mlを20アンプル、

時間0・5mlから同じくシリンジポンプで精密持続点滴そして様子を見ます」

「ふむ、ほぼ正解、いいだろうそのオーダーで治療を開始しよう、

ICUの方に移して

奥さんには病状を説明して」

どこか悔しそうな看護師たちに、片はにやりとした笑みを向けた後

朦朧とした患者に向き直る。

……あんたは不本意かもしれないが、そう簡単に死なせやしない……と心中で呟きながら。

※

「どうだ」

二時間後ICUに患者の様子を見に来た片は、ベッドの脇で真剣なまなざしでシリンジポンプのメモリを確認していた市川看護師に短く尋ねた。

「今のところ落ち着いていますよ」

「そうか。面倒な点滴の指示を出して申し訳ないが、よろしく頼む」市川が驚いたような表情をしたので、片は

「どうした？」

と再度尋ねる。

「あ、いえ、片先生がよろしく頼むなんて言うなんて思っていなかったのです」

「なんだよそれは。俺はそんなに傲慢に見えるのか」

遠慮がちに頷いた市川に、片は気まり悪そうにぐしゃぐしゃと前髪をかきあげた。

「ああ、確かに俺はこの皆さんが敬愛する小鉢先生に事あるごとに盾つく

生意気な研修医だよ。だけどな、人としての最低限の礼儀まで知らない訳じゃない」

その言葉に市川はもう一度驚いたように軽く目を見開いた後、「安心しました」

と小さく笑いながら言った。片が首をかしげると、

「私、昔から直感が鋭くて人の第一印象を外したことがないんです。でも片先生は

外しちゃったみたいで、ひそかにがっかりしていたんですよ」

と市川は続ける。

「へえ、俺の第一印象ってどんな感じだった？」

「不器用な人」

「……」

どう答えていいか判らず片は黙り込んだ。

「感情を言葉と態度で表すのが下手そうだなあって思ったんです。憎まれ役になっちゃうこと、多かったんじゃないですか？」

市川の言葉は乾いた土の上に降り注ぐ恵雨のように、片の心に染み込んだ。

ふいに目の奥が熱くなった。

久しく感じていなかった涙が出そうな感覚に片は戸惑う。

「……さあな。安心した所で引き続きよろしく頼む。

命に別状はないだろうけど

自殺未遂だから、何をするか判らない」

それを白衣のポケットに突っ込んだ手をきつく握りしめる事で誤魔化しながら

片は努めてぶっきらぼうな口調で言った。

「判りました。先生、安心したついでに一つ言わせてもらっていいですか」

「？」

「自殺未遂で何をするか判らないと思うんだったら、家族に抑制同意を取って下さいね。

さっきまでせん妄症状が出て、

点滴や尿道カテーテルを引き抜こうとして大変だったんです」

「悪かった、早速家族に同意を……」

「もうとりましたよ、ミトン抑制しているでしょう。

ついでにマーゲンチューブを抜いてもいいですか

患者さん、意識があるので苦しそうで」

慌てて部屋を出ていこうとした片に、市川は今度は苦笑しながら告げた。

見れば確かに、患者の両手には白く柔らかい布製のミトンがはめられている。

「ああ、いいよ」

市川の手がするりと細く透明なチューブを患者から抜き取る、とたんくぐもった嫌な音が患者の喉奥から漏れた。

「離れろ」

片が市川を突き飛ばした半瞬の後、患者の口から勢いよく赤黒い活性炭交じりの血液が吹きだされる。

「片先生」

「小鉢科長を呼べ、早く」

油性マジックのような凄まじい匂いのそれを片は頭からかぶりながらも、

患者の上にかがみこんで容態を診る。

駆けつけた小鉢は、片の姿を一目見た瞬間に何が起きたのか察したらしい。

手振りで片を患者から遠ざけると、患者を手早く診ると新しいマーゲンチューブを挿入した。

「仰臥位だったから、誤嚥したんだろう。」

マーゲンチューブを抜くのが早すぎたな。片君の指示か」

「いえ、私が」

「俺の指示です。すいません配慮が足りませんでした」

市川の言葉を遮って、片は髪の毛や白衣に

べったりと患者の吐血を張り付けたまま

謝罪する。その様子に小鉢は意外そうな顔をしたものの、

「意識レベルが落ちた。」

一次的な物だと思うけど目を離さないで、意識が回復したら僕を呼んで。片君はすぐにそれを洗い落としなさい。

あまり早まったことはしないように」

とだけ言って部屋を出ていった。

「すみません」

「抜けと言ったのは俺だ、市川さんが謝ることじゃない」

深く頭を下げる看護師に

、片はまたぶつきらばうにそう言うと言った。シャワー室に向かった。

本当は患者以外は使用禁止なのだが、

拭ったくらいではこの血は落ちそうにないので大目に見てもらおう事にする。

だが、10分以上シャワーを浴びても

油性マジックのような匂いは一向に消えてはくれなかった。

馬鹿な事をしたなと自嘲しながら青いER着に着替える。

こういう日に限ってYシャツに白衣で治療に当たっていた。

多分、もう使い物にならないだろう。濡れ髪のまま医局に戻ると、

無人の室内にコーヒーの香りだけが漂っていた。

自分の机の上に湯気の立つマグカップと数枚のクッキーが置かれている。

そして添えられた「ありがとうございました」とだけ書かれたメモ用紙。

ブラックのはずなのに甘く感じるコーヒーを、

片はなぜかまた目の奥が熱くなる感覚と共に飲み干した。

続く

第六話

十日後、件の農薬を飲んで自殺を図った患者は話が出来る程度まで回復した。

「片君、心療内科の羽場先生が^{ういば}

中村さんを診察するそうだが、勉強の為に同席するかい？」

小鉢科長にそう言われて片は頷く。

この診察の結果しだいとその患者――中村は

内科病棟に移動になるか、それとも精神科のある

他の病院に転院になるかが決まると言う。

羽場医師は半分ほど白髪になった髪を

やや長めに伸ばした初老の医師だった。

小太りな体躯と救急外来科にはいるとひととき目立つ、

ゆったりとした足取りは片に以前、

テレビで見たアフリカの草原で草をはむヌーを連想させた。

ちょうど空室だったICU特別室、通称ヘブンズドアに中村のベッドを移して

羽場医師の診察が始まった。

「私は定年後すぐから、住んでいる地区の町内会長を引き受けていました」

名前や年齢、さらに今日の天気や体調などの

何気ない話を羽場医師と交わしていた中村は

やがてとつとつと自らの事を語りだした。

若槻市はここ数年で宅地開発が進み

、他所から新しい住人たちの流入が盛んになってきている。

中村の住む地区も例外でなかった様だ。

「新しく入ってきた方全てがそうだとはいいませんが、

中にはこのルールになじめない方もいらっしゃるようで」

新しい住人と古い住人との間にトラブルが起きる度に、

中村は調停役として駆り出されていたらしい。

「百貨店に勤めていましたね。長年お客様係も務めていたので、苦情処理には自信があったのですが」

それでも時間を問わず頻繁に持ち込まれるトラブルは、解消しきれぬストレスとなって中村の心身を蝕んでいったのだろう。そして、半年前彼は脳梗塞を起こした。

「こちらの病院にお世話になってから、

大分体は動くようになりましたが、それでも以前と同じ、と言う風にはいきません。

私は退院したら町内会長を辞めようと決心していました」

だが、退院していた中村を待っていたのは、

こじれにこじれたご近所トラブル。

「やめる、と言い出せる雰囲気ではありませんでした」

その時の事を思い出したのか、中村の表情が暗く沈む。

最初は些細なきっかけで始まったそれは、

中村が介入したところにはすでに複数の家を巻き込んだ

中傷合戦にまで膨れ上がっていた。

「まいりましたよ、話し合いの場をもうけても

お互いの悪口を言い合うだけで……。

最後には旦那さん同士が殴り合いまではじめるんですから」

そのうち、中傷合戦は車や門扉を傷つけるなどの嫌がらせに発展し、
そ

うなると地区の他の住民の非難は

もめごとを解決できない中村にも向けられるようになった。

「そのうち、呼び鈴や電話の音がする度に怖くなりましたね。外に出たら出たで、

道を歩く人が皆私を非難しているような気がして」

と中村は本人は笑顔だと思っているらしい、

唇が引きつれた奇妙な表情を浮かべた。

羽場医師は枕元の椅子に座って、

片は腕を組んで壁に寄りかかり口を挟むことなく中村の話を聞き続ける。

「相変わらずトラブルはちっとも解決しないし、で、ふと思ったんです。

私が死んだら、この人たちは責任を感じて争いをやめてくれるんじゃないかって。

そう考え始めたら、自殺が唯一の解決法のように思えてきて……」

「それで自殺を図ったんですね」

初めて口を挟んだ羽場医師に中村は小さく頷く、とその肩が小さく震えだした。

「私が悪いのです、もう少し私がしっかりしていればトラブルも解決しただろうし」

声を震わせてうわ言のように中村は呟き続ける。

「そんなことはありませんよ。よくがんばりましたね」

それを優しく慰める羽場医師。その両者を片は怒りにも似た表情で見つめていた。

※

「まったく馬鹿馬鹿しいにも程がある」

医局に戻るなり片が乱暴に吐き捨てた。

「何が、かな片君」

と訊ね返した小鉢科長の顔をイライラと睨みつけて、片は再度口を開く。

「中村さんの自殺に理由ですよ。自分が死ねば争いが解決すると思ひ込むなんて。

大体嫌がらせまでするような人間はそんなことぐらいで改心しませんよ」

「羽場先生からおおよその経過は聞いたが……、恐らく責任感が強い方なんだろうな。お気の毒に」

「責任感が強い？ ちがいますよ、自己犠牲の快感に酔っているだけ

です」

「片君、少し口を慎みなさい」

小鉢科長の口調が強くなった。だが、片はそれを無視して話を続ける。

「小鉢科長だって御覧になったでしょう、病状を説明した時の奥さんの顔を。本当に責任感の強い人だったらまずトラブルが持ち込まれた時に、第三者に解決を依頼して自分は身を引くべきだったんだ。」

脳こうそくを患って、会長職を続けられないと自身で判っていたんだし、

町内会長なんて名誉職にすぎないのですから。それをなし崩しに引き受けてしまったということは、見栄もあったんでしょよ」

「だが……」

「それを手に負えなくなったからと、自殺でカタをつけようとするなんて

残された家族はどうすればいいんですかね。脳梗塞の手術をした白鳳大学病院もいい面の皮だ。せっかく助けた患者が自分で命を絶とうと

したなんて、笑い話にもなりはしない」

「いい加減にしたまえ。ご家族かご本人の耳に入ったらどうするつもりだ」

その言葉に片は歪んだ笑みを浮かべる。

「聞かれたっていいと思いますがね。俺は間違った事をいつているつもりはありません。なんだったら中村さんの目の前で同じことを繰り返してもいい」

「片君」

小鉢は一瞬だけ怒りの表情を浮かべた後、直ぐにそれを消し、代わりに

諭す様な口調で話します。その様子が片の心を逆なでした。

「確かに君のいう事も一理あるかもしれない。だが、医師が患者を

責めてどうする」

「じゃあ、科長は患者を貴方は悪くない、と甘やかせと？」

そんな事をすれば、患者は生涯自分の犯した過ちに気付かない」

「そんな事は言っていない」

小鉢は苦い表情で首を振った。

「いいか片君。中村さんの自殺を自己満足だと君が思い込むのは自由だ。

だがそれは君の主観にすぎず、それで患者を責めることは筋違いだ。君は手技だけを見れば研修医のレベルを超えている。だけどね、もう少し

自分を客観的に見つめて、感情をコントロールしていかないと、そのうち取り返しのつかない事をおこすよ」

その言葉に、片は頭が真っ白になるほどの怒りを覚えた。

「……現実を受け入れられないあんたに、言われたくない」

「なに？」

怪訝な表情で問い返す小鉢科長に、片は絞り出すような声で続ける。

「いくらここで他人の命を助け続けても、お子さんたちは

生きかえりませんよ」

小鉢の表情が、いや、全身が凍りついたように固まる。

それを見た片の心の奥底に、また昏い喜びが広がった。

「大学の図書館で調べものをしていたら、

偶然古い新聞記事を見つけたんですよ。

H大震災で最も早く怪我をした被災者の受け入れ態勢を整えた病院の医師が

科長だったんですね。他人の怪我を治療していたら、自分の子供達が自宅で

死んでしまっていた。不幸ですね。同情します」

そう思っていないことは丸わかりな口調で、しかも薄笑いさえ浮かべながら

片は言う。あの日、インターネットで見つけたのは、

震災で自分の子供二人を失いながら

被災者の治療を続けた小鉢医師を賞賛する記事だった。

「さぞ悲しみも深い事でしょう。しかし、それを仕事で紛らわすのはいかなものかと思えます。科長の度を越した仕事への貢献は、いずれこの科の

破綻をも招きかねない」

「……」

小鉢は片を無言で睨みつけた。彼が握り締めた拳は皮膚が白くなり、微かに震えてすらいる。

それが爆発しそうな怒りの前触れのように、

それを見た片の背筋を恐怖と高揚、二つの相反する感情が同時に駆けあがっていった。無言の時間が流れる。

「俺、間違っていますか」

ついにしびれを切らした片が問いかける。

小鉢はそれに答えることなく、部屋を出ていった。

……逃げたか……

怒鳴られたら負けじと反論してやろうと身構えた分だけ、片は虚脱した。

崩れるように椅子に腰をおろし、そのままどのくらいたたただろう。廊下のほうがやけに騒がしくなり、片は立ち上がった。

外に出ると、トイレの前に白衣を着た集団が

慌ただしく動き回っているのが見える。

「何があった」

片が駆けつけると、ぴたりと騒ぎが収まる。そして

「君は来るな。患者さんが興奮する」

集団の中心にいた羽場医師が怒鳴り、それを取り囲んでいた看護師が一斉に恐ろしい表情でこつちを見た。

「行くぞ」

だがそれも一瞬、羽場医師の掛け声とともに、看護師達が一斉に動き出す。

その手が誰かが乗ったストレッチャーにかかっている事に片はようやく気付いた。

「片先生」

訳も判らずに、去っていく白衣の集団を見つめていた片がかけられた声に振り返ると

そこに立っていたのは市川看護師だった。

「市川さん、なにが……」

「最低!!」

叫び声と共に、ばしやりと冷たい物が全身を濡らす感覚がある。

市川が手にしていた生理用食塩水を自分にぶちまけたのだと理解するまで、しばらく時間がかかった。

「いっくら医局の中でも、あんな風に患者さんをけなす事ないじゃないですか。」

中村さん、トイレに行く途中で聞いちゃったんですよ。先生の言葉。もう一回死ぬって騒いで、鎮静させるまでが大変だったんです。

先生は小鉢先生につっかかるのに夢中で知らなかったみたいですけど」

「……それは」

「小鉢先生への言葉だって酷すぎます」

「でも、事実だろう」

掠れた声でようやく反論したとたん、

片の胸に空っぽになった生理用食塩水のボトルが投げつけられる。

「冷血漢!! 早く白鳳大学に帰って下さい!!」

そう叫んで駆け去っていく市川看護師の後ろ姿が消えるまで、

片はその場から動くことが出来なかった。

続く。

第七話

飴色の陽光とねっとりとした体にとわりつく暑さの中を、片は一人で家路をたどる。

額から吹きだした汗がいく筋も頬を伝っていたが、彼はそれをぬぐうことなく足早に

歩き続けた。

「丈一郎君」

ふいに馬鹿にしたような呼びかけと共に、

前方に三人のクラスメイトが立ちふさがる。

「何？」

問い返した自分の顔はきつと怯えていたのだろう。

三人は顔を見合わせ、にんまりと笑い合った後

ほら、と一人が片のTシャツの胸元に両手を伏せた。

Tシャツの薄い布地ごしに感じる感触とじーっという嫌な音に背筋がぞわりとする。

「プレゼント」

手が放されると、そこには大きな蝉がしっかりとTシャツにしがみついていた。

「やだ、やだやだ、取ってー！ー！ー！」

三人が爆笑する中、片は悲鳴を上げてやみくもに走り回る。

蝉がTシャツから夕暮れの空へと飛び立つまでの僅かな時間が永遠にも等しく感じられた。

「東京もんは弱虫だなあ、蝉がそんなに怖いんか」

路上に座り込んでしまった片をひとしきり笑った後、三人は駆け去っていく。

その足音が聞こえなくなった頃、

片の心中に猛烈な悔しさが湧きあがってきた。

「嫌だ、もう嫌だ」

叫びながら片は駆けだす。

どうして、虫が嫌いというだけで、

東京から来たと言うだけで馬鹿にされなければならない。

息を切らしながら自宅でもある村の診療所に辿りつくと、

住居の方ではなく診療所の古くきしむ扉を押した。

今の時間、父がいるのはこちらの方だ。

いつもは患者でこった返しているはずの待合室は、しんと静まり返っていた。

「お父さん、もう嫌だ。東京に帰ろうよ」

それを疑問に思う余裕もなく、片は叫びながら診察室の扉を乱暴に開ける。

「おとうさ……！！」

その瞬間目に飛び込んできたのは、飴色の陽光に照らされ白衣の裾をまわりつかせながら宙空でふらふらと揺れる二本の足だった。

※

じーっという耳障りな鳴き声に、片ははっとして目を開ける。

煌々と輝く蛍光灯に誘われたのか、大きな蝉が一匹、

網戸にした医局の窓に張り付いていた。

片は舌打ちすると、机の上に置いてあった

分厚い医療品のカタログを丸めて窓に叩きつける。

蝉はふらふらと闇の中に消えていき、片はため息をつくと時計を見上げた。

深夜0時まであと15分。座ったままうたた寝をしていた時間は10分程か。

短い間によくここまでの悪夢を見たものだ

苦笑しながら生ぬるくなってしまったコーヒーを啜った。

多分、蝉のせいだろう。夏が来てその声を聞く度に、

思い出したくもない記憶は必ず蘇ってくる。

医局に誰もいなくて良かったと、片はもう一度ため息をついた。今日の当直は自分と別当医師だが、彼は急患が来たら呼べ、と整形外科の医局へ引き上げてしまっていた。

中村が病院のトイレで再度自殺を図って半月が過ぎている。

その後、中村は内科病棟に一度移動になった上で精神科のある病院へ転院していき、

片の「生意気、傲慢」という評判にもう一つ「冷血漢」が加わった。名付け親は言うまでもない。

もはや小鉢医師ですら、必要最低限のことしか彼と喋ろうとはせず別当医師や看護師達に至っては、挨拶さえ返してくれない。

ここまで嫌われるといっそすがすがしい、と

片はまた屋上まで話をしに来てくれた小鉢女医と、

彼女から話が伝わったのか、電話をかけてきた姉にうそぶいて同じ言葉を返された。

「なに強がっているのよ、この馬鹿」

さすが友人同士、と感心するべきだろうか。

その後、ため息交じりに続けられた二人の説教もまたよく似たものだった。

「叱咤というのは相手が心身ともに健康であって、初めて受け入れられるものよ」

煙草をくゆらせながら小鉢女医はそう言った。

「たとえ正論だったとしても、あんたがやったことは

断崖絶壁に立った患者さんの背中を突き飛ばしたようなもんや」

電話越しでも渋い顔が容易に想像できるような声で、姉は語る。

「あんた、いくら外科医というても手技の腕だけ磨けばいいってもんやないで」

「片君」

ふっと紫煙を口から吐き出し、小鉢女医は片をじっと見つめて言った。

「君は外科医、いえ、医者という仕事を何か勘違いしてない？」

二人の言葉を交互に思い出すと、ちりちりと胸底を焦がすような苛立ちを覚える。

違う、俺は……ただ……。

突然鳴りだした電話が片の思考を中断させた。

受け入れ要請ではない、病院の代表にかかってきた電話がここに転送されてきたのだ。

しばらく放置していたが、電話が鳴りやむ気配はない。

仕方なく片は受話器を取った。

「もしもし、坪内総合病院救急外来科です」

不機嫌極まりない声に返事はない。

悪戯か。苛立ちのままに受話器を叩きつけようとしたその時

「……あの」

遠慮がちの小さな声が、ぽそりと聞こえた。

「もしもし、大丈夫ですか、もしもし」

片は慌てて再度受話器を耳に当てる。

まさか、急に具合が悪くなってとっさに病院に電話したのはいいが、声が出ない状況になっているんじゃないだろうな。

「坪内総合病院、ですよね」

「はい、そうです」

「お医者さん、何人くらい勤めてるんですか？」

「はあ？」

片は思わず問い返した。電話の向こうの相手は一体何が言いたいのだろう。

「何人くらい勤めているんですか？」

もう一度問いが繰り返される。

「さあ、詳しくは判りません。悪戯ですか、切りますよ」

「まって、待ってください」

慌てた声には聞き覚えのある独特の訛りがあり、片はぎくりと身体をこわばらせた。

「そちらに勤めているお医者さんをどなたか、村に、仙沢村に派遣して頂けませんか」
不可視の氷の手に心臓を鷲掴みにされたような心地がして、片は反射的に電話を叩きつけるように切った。

※

「よう、丈一郎君。ひっさしぶりだなあー」

慣れ慣れしく名前を呼んで、バンバンと背中を叩く相手を

片は強張った笑みで見返した。

口元に強いひげが生え、体つきもがっちりとした固太りになっていたが

その顔つきには確かに片を東京もんと嘲り、虫をけしかけて笑っていた

意地の悪いクラスメイトの面影があった。

「どうした、そんな顔して。わかったあ、仕事が忙しいんだろう。

同じ県内と言っても若槻市は栄って（さかって）いるからなあ、

病院にも患者があふれてるんだろう。まあ、とりあえず一杯やろうや」

片の心中などまるっきり気付かぬ様子で、かつてのクラスメイトは上機嫌で

居酒屋の看板を指差す。

「そんな所で話なんかできるのか、ええと」

「何だよ、昨日改めて名乗っただろう。山田、山田雄一。もう忘れたのか

ボケるには早すぎるぞ、さあ、いこういこう」

忘れたんじゃないくて覚えたくないだけだ。と片は胸中で吐き捨てたがそれでも山田の後に続いて居酒屋のドアをくぐった。

「いやあ、世の中神や仏は確かにいるんだ。藁をもすがる思いでか

電話を丈一郎君が取ってくれるなんて」

生ビールの中ジョッキをあおりながら相変わらず上機嫌で喋り続ける山田の言葉を、片は複雑な思いで聞いていた。

昨夜、仙沢村の名前を聞いた瞬間に切った電話は、一分もしないうちに再びかかってきた。

鳴り続ける電話をさすがに不審に思ったらしく、医局を覗き込んだ看護師は

恐ろしい物でも見るような眼つきで電話を眺める片に

「先生、いるのなら電話を取って下さいよ。」

急用かもしれないじゃないですか」

と冷たく言い放つ。

こんな時にかぎって急患の受け入れ要請がくる気配は欠片もない。

渋々電話を取った片は、相変わらず医師派遣をと

いい続ける相手をなんとかなだめ、

明日改めてかけ直してくれるように説得した。

「じゃあせめて、せめて先生のお名前を教えてくださいませんか」

まるで壊れたテープレコーダーのように同じ言葉を繰り返す相手に

片はうんざりする、こんな輩に名前など教えたくないが、

このままではいつまでたっても電話を切りそうにない。

「……片、丈一郎です」

「片……、片と言うと仙沢小学校に4年生の時に

東京から転校してきた丈一郎君か？

診療所の自殺した先生のところの」

今、この瞬間にICUに入院中の患者が一人残らず全快したとしても、

これほど驚くことはないだろうと片は思った。

「はい」

と答える自分の声が他人の様に遠くから聞こえた。

「本当に丈一郎君か、なんて運がいいんだ。俺だよ、覚えているかなあ。」

同じ学年だった山田雄一。ほら、よく一緒に遊んだだろう、放課後に」

片の脳裏に蘇るのは先ほどの悪夢。

片の胸元に蝉を押し付けたクラスメイトの名前が確か山田だった。凍りついたように固まった片の耳に、丁度いい、明日会えないか。

20時に若槻駅の前でとまわしたてる山田の声が流れ込んでくる。

一方的に交わされた約束、守る義理など少しもないのに片は当直明けの次の日、

うわの空で勤めて、何度も小鉢科長に注意された勤務が終わると若槻駅に向かい、

そして二度と会いたくないと思っていたはずの級友と再会した。

「で、いつ村に来てくれるんだ？」

「おい、勝手に決めるな」

べらべらと喋り続ける山田の話を黙って聞いていた片だったが、

彼の中で勝手に自分が村に行く事が決定事項になっているようにだと判ると、

慌てて口を挟んだ。

「え、だってその為に来てくれたんじゃないのか」

きょとんとした山田に片は

「医師は自分で好き勝手に職場を移れないんだ」

と噛んで含めるように説明を始める。

医師のほとんどが大学を卒業と同時にどこかの「医局」に入局する。

一応建前では個人の自由意思でとなっているが

医局に入局しない医師はよほどの変わりものか、問題があるとみなされてしまう為、

医局入局率はほぼ100%に近い。

そして、医師の人事権はこの医局が握っているのだ。

頂点に立つ教授がどこそこへいけ、といえ、それがたとえどんな場所であろうと

従わざるを得ないし、逆に医師個人がここにいききたいと申し出ても、

教授が首をたてにふらなければ希望がかなう事は難しい。

これが、戦後から今まではほぼ日本全国に

医師をまんべんなく供給できたシステムである。

「じゃあ、何処に申し出れば村に医師を派遣してくれるんだ」

「さあ、役所の担当部署に申し出るしかないんじゃないか」

「そんなのとづくにやってるさ」

山田は乱暴にジョッキをテーブルに叩きつけた。

「何度足を運んでも「申請中」の一点張り、

なあ丈一郎君の方からその、教授に直接頼めないか」

「馬鹿言うな。俺はまだ大学を出て二年目の研修医だ。

教授にものを頼める立場じゃない」

「じゃ、じゃあ。名前だけでもかしてくれよ。

ほら、名前だけの会社役員とかよくいるだろう」

「できるか、そんな事」

今度は片が手にしていたウーロン茶のグラスを乱暴にテーブルに置く。

山田はビールを勧めたが、車だからと断っていたのだ。

研修医の分際で名義貸しなどした事がばれば、

今度は懲罰人事どころではすまない。

「なんだよ」

山田の顔が怒りに歪んだ。よそ者を執拗に苛めていた意地の悪い小
学生の頃と

その表情は不思議と全く変わりがなかった。

「元はと言えばお前の父親が自殺したから悪いんだろう」

その言葉は不可視の刃となり、片の身ではなく心を容赦なく切り裂
いた。

「なん、だと」

「お前の父親が自殺して以来、村には碌な医者が来なくなった。し
かも

皆1年と持たないんだ。そしてついに国道開通を理由に村から医師

が消えた」

「その何処が悪いんだ」

村に医師がいなくなっても、

若槻市までの交通の便が整備されれば問題はないはずだ。

「近いと言っても、歩いていける距離じゃない。

年寄りには行くだけで一仕事だ。

それを理由に近藤の一族は、県が提示したダム建設案に是と言ったんだ。

立ち退き料をもらって若槻市に移りすもうってな」

「ダムって……仙沢村が水の底に沈むのか」

「ああ」

忌々しそうに赤黒い顔で山田は頷いた。

「いくら人口が減って高齢化がすすもうと、

あそこは俺たちの生まれ故郷で

御先祖様が必死になって開墾した土地だ。

それをいくら金を積まれたからと言って

平気で水底にしずめようといういだすなんて、

近藤は性根が腐ってる」

片の見知らぬ人間への呪詛を吐きながら、

山田はジョッキに残っていたビールを飲み干す。

「だから村には医師が必要なんだ。医師さえ来てくれれば村の年寄りはお前来てくれよ。父親のしでかした事の責任を取ってくれ」

「ふざけるな」

怒りに声を震わせながら、片は持っていたカバンから

一冊の分厚い皮張りの冊子を取り出す。

父親が死の直前までつけていた、日記帳。

「どうして父親が自殺したか、ここに全部書いてある。読め」

目の前に叩きつけられた日記帳を山田は怪訝な顔をして取り上げる。

「16年前の日付からだ」

片の言葉に従って山田はページをめくる。やがて

「これは……」

呻くような呟きが、彼の口から漏れた。

続く

第八話

片丈一郎の父、敬一郎は「書く」事を趣味の一つとしていたようだった。

そうすることで自分の思考を明確化し、

言う事の出来ないストレスを発散していたのかもしれない。

十年用の日記帳には、父が命を絶つその日まで

ほぼ毎日の日付の下に几帳面な字でびっしりと

今日あった出来事や、それに対して思った事が綴られていた。

無論仙沢村に赴任する事になった経緯や、村での日々も。

東京の医大で内科の助教授をしていた敬一郎は、

主に末期がんを診ているうちに

1970年代からカナダで提唱された「緩和ケア」に関心を抱くようになったらしい。

その関心はやがて「緩和ケア病棟」設立への夢にと変化した。

だが、1980年代初めの日本の医療界は「延命の為の治療」が第一で、

敬一郎の唱える「緩和ケア」に耳を貸すものはいなかったようだ。

彼の提案は受け入れられる事はなく

緩和ケア病棟設立の夢は、夢のままで終わった。

敬一郎が所属する医局に仙沢村へ医師派遣の話が舞い込んできたのはそんな時。

本来ならある程度経験を積んだ平の医局員が行くような件を、

彼は自分が行くと申し出て周囲を驚かせた。

「私は、多方向に目を向けるべき医療の世界で、

たった一つの方向しか見ようとしない大学病院に失望していた」

仙沢村に赴任する事を決めた日の日記に、敬一郎はこう記している。

「父は生まれも育ちも東京で、田舎に過剰な憧憬を抱いていたんだろうな」

山田から返された日記帳のページをぱらぱらと弄ぶようにめくりながら、

片は皮肉げに呟く。対面の山田は、重苦しい表情のまま押し黙っていた。

「父は多分夢見てたんだろう」

山間の小さな村の診療所で素朴な村人たちから「お医者様」と慕われながら、

「緩和ケア」の実践を試みる事を。

実際、日記には数ページにわたってその草案が書かれていて、そして仙沢村はその当時から高齢化が進み始めていた。

「妻は最初は反対していたが、

結局は勤めていた病院を辞めてついて来てくれる事になった。

晶子は受験の為に自分で東京に残る事を選択した。

あの子も15歳、意見を尊重したい」

と日記に記しているように皮膚科医だった母と、小学生だった自分を連れて父は

東京から新幹線で1時間半かかる若槻市から、

さらに自動車で半日の距離の山間にある仙沢村に移り住んだ。

「だけど現実はどう甘くなかったってことだよ」

山田ではなく、遠くを見つめながら言った片の表情も苦いモノに変わる。

東京から来た医師一家を待ち受けていたのは、

牧歌的で素朴な人々が暮らす山村ではなく、

排他的で独自の風習や価値観が色濃く残り、

どこでも人の目と耳が網の目のように張り巡らされている、

「村社会」だった。

敬一郎がまず手を焼いたのは「自分達が医師を東京から連れてきた」と

思い込んでいる村長一族の無茶な要求だった。

不要なビタミン剤の処方や点滴、特別扱いを実感したいがためだけの

時間外往診、不必要な往診。

助教授として大学病院では敬意を表される立場だった敬一郎は戸惑いつつも、誠意を持って何度も患者は平等であり特別扱いできないと説明し、

その度に「三流医師の癖に、我々に逆らうのか」と罵倒された。

「三流医師」という蔑称はいつのまにか

敬一郎の呼び名として定着してしまった。

村の貧弱な治療設備では、必然的に確定診断ができる病気が限られてくる。

若槻市の病院へ紹介状を書く度に、患者の口からは感謝ではなく

「三流医師だから碌に病気の診断も出来ない」

という言葉が吐かれた。

『厳しい山間で生き抜くために村全体が家族のようになってしまっているここに、

東京から来た私が受け入れてもらえるのは難しい。

しかし、誠意を尽くせば必ず分かってくれるはずだ』

その頃の日記には、敬一郎が自らを励ます言葉で埋め尽くされていた。

そして、村人たちの仕打ちに苦しんでいたのは彼だけではなかった。

母は最初は医師として父と共に診療にあたっていたが、老人達に

「女先生の診察では信用できない」

と言われたのをきっかけに、二度と診療所に出てこなくなり、家に閉じこもるようになった。

社交好きの母にとっては辛かったと思うが、

村の婦人達に一挙手一投足を監視され、

噂を流されるよりましだと思っていたのだろう。

「俺も、色々やられたな」

片の呟きに、山田が気まりわるげな表情になった。

「東京から来た医者先生の息子」として片は大人達からは大事にされたが、

それがかえって子供達の嫉妬をかき立てる結果になったようだ。

「いやあ、丈一郎君が虫嫌いだったから。ちよつとからかったただだよ」

もごもごと口の中で言い訳をする山田に、片は冷笑で答える。

ちよつと、か。真冬に火の気のない体育館倉庫に閉じ込めたり、中身の詰まったランドセルを沼の中に放り込んだりしたことも、やった方から見ればちよつと、の事なのだろう。

無論、虫を手渡されたり、服にこすりつけられた事は数え切れないほどだ。

何度泣いて家に帰り、母親に無言で抱きしめられた事か。

きつと母も悔しかったのだろう。だが、

抗議すればそれは何倍にもなっけてしかも複数から返ってくる。

黙って耐えるよる他はなかった。

敬一郎も、妻と子の受けた仕打ちを知らないわけではなかったらしい。

日記に何度もすまない、もう少し我慢してくれと記しながら、彼は真夜中でも要請があれば往診に行き、

死にゆく患者には、臨終の瞬間まで側に付き添った。

そんな献身的な医師に感謝の声も無論あっただろう。

だが、悪評の方がより大きく聞こえ、

いつまでも残りつづける。それが世の中というものだ。

どれほど敬一郎が村人の為に尽くしても、「三流医師」という評価は変わらなかった。

昼食の為に僅かな時間、買いものに出ただけで

「患者を待たせて買いものか」

と嫌味を言われ、次の日診療所に来た患者達に「怠け者」とのしられた。

日記には、村人たちから受けた仕打ちが詳細に綴られつつも、文章の最後には必ず

「いつかきつと判ってくれる」という言葉が空しく書かれていた。

そして、村に来て1年半後、敬一郎の日記は激変した。

几帳面な文字はミミズののたくったような乱れたそれに代わり、文章の代わりに

「疲れた」「しんどい」「東京に帰りたい」「人の目が怖い」

という単語ばかりが並ぶようになった。

派遣の契約は三年。まだ半分しか過ぎていなかった。

それでも敬一郎は精神と肉体、両方をぎりぎりまで追い込まれながらそれでも診療を続けたのだろう。

だが、「夜訪れる患者さんの為に、自費でつけた電灯を、割られた」

「税金で、無駄遣いするなど書かれたビラが、貼られた」

この二文が彼が綴った最後の日記。

その後ろのページに書かれているのは

「私の死が、多くの医師とそれが必要としてくれる人達に何かを考えさせ、

気付かせてくれる事が最後の願いだ」

という、遺書。

以前のように美しく整った文字が、彼の死へのゆるぎない決意のようである。

かえって痛々しかった。

そして敬一郎は村に来て以来もっとも長い時間を過ごした診療室で、首をつりそれを学校から帰った彼の息子が発見した。

「……知らなかったよ」

「そりゃあ、君は子供だったからな」

ため息と共に呟いた山田に、片は皮肉げに答える。

「近藤のやろう、陰湿なやり口は昔っからだな」

「その、さっきから君がいつている近藤って誰なんだ」

片の問いに、山田はああ、と居住まいを正し声を低くした。

「村長を何回か務めたくらいで村を牛耳った気になっている鼻もちならない野郎たちさ大体な……」

と語りだした山田の話を要約すると、

仙沢村は昔から「近藤」と「猿渡」という有識の家が二つあり

村の実権を握ろうと争ってきた。狭い村の事、残りの家は自然とどこちらかの家に

組みする事になり、それは戦後任期制の「村長」の座を狙った激しい選挙合戦に

変化した。そして、選挙の結果によって村内での人の力関係はがらりと変わり、

また、それが皮肉にも村を衰退させる原因の一つになった、ようだ。

「自分達に逆らう者は手段を選ばず追い詰めて叩き潰す、それが近藤の

やり口だ。自分の要請で村に來たはずの片先生が、特別扱いしてくれなかったので

激高したんだろう。今度だって俺達が支持する猿渡先生がせっかく若槻市までの

立派な道路をこしらえて下さったのに、それが気にいらなからと言って

村そのものをダムの底に沈めようとしている」

「そうか」

つばを飛ばしながら喋る山田に、片は無表情に頷いた。

今更父親を死に追いやった原因を、小さな村の勢力争いに絡められて説明されてもなんの感慨もわかなかった。だが、

「丈一郎君、やっぱり仙沢村にきてもらえんだろうか」

「何度も言っているだろう、医者……」

「いや、片先生の、お父さんの名誉回復の為に」

そう言われて片は黙り込んだ。

父親の自殺は村では「不浄で不快な出来事」として扱われ

葬儀は東京からやってきた姉だけが加わった母子三人の寂しすぎるものだった。

「三流医師の癖に、最後まで村に迷惑かけて」

それが二年間村人の為に尽くし、そして母親の胸にすっぽりと抱く

事ができるほど

小さくなって村を去っていく父にかけられた最後の言葉だった。

東京に戻った後、母は猛然と働き始めた。

それは、父を失った悲しみを忘れ去ろうとしているようでもあり、「女である」というだけで自分の診療を拒んだ仙沢村の人々への当てつけ、のようにも見えた。

都心の雑居ビルの一室でひっそりと開業した「片皮膚科」はやがて協力者を得て

「片美容整形外科」となり、十年で都心に自社ビルを建てるまでに成長した。

が、その一方で父の話は家の中ではほぼタブーとなり、たとえ命日であっても

各々がひっそり墓参りに行くだけになっていた。

父の名誉回復、山田に言われて始めて片はそれを望んでいる自分に気づいた。

黙りこんだ片を脈ありと見たのか、山田はさらに続ける。

「実は今村は村長選の最中なんだ。

丈一郎君がお父さんの日記を持ってきてくれれば

近藤陣営に強烈なダメージを与えられる。

なにせ、自分達が要請して、そして派遣された

医師を自分達が自殺に追い込んだんだから」

相変わらず黙りこくっている片に、山田は来るんだろう、いつ来てくれる？

早い方がいいな、と畳みかける。

「来週の、日曜日なら」

長い沈黙の後、ようやく呟くように答えた片に、山田は満面な笑みを向けて

よかった、まっている、ありがとう。と一しきり礼を言った後

もう一か所寄らなければ行けない場所がある、と机上に皺くちゃの一万円札を置くと

慌ただしく店を出ていった。

そして、それが店の空調に吹き飛ばされ店員が慌てて拾い上げてもまだ、

片は日記に片手を置いたまま宙空を見つめ続けていた。

※

「ただ今所用で電話に出られません御用の方は……」

耳に流れ込んでくる無機質な声に片は苦笑して携帯電話を切った。

山田と会ってから1週間が過ぎた日曜日、約束の日。いまさら何を迷っている。

全ては自分で決めた事じゃないか。

それでも、数分待って片はもう一度携帯電話を耳に当てる。

流れてきた先ほどと同じような無機質な声の後に

「ああ、姉さん俺だけど、今日仙沢村にいつてくる。

上手くすれば父さんの名誉を回復できるかもしれないから」

とだけ告げた。

駐車場に止めてある愛車のランドクルーザーに乗り込み、エンジンをかける。

これほど重い気持ちでこの車に乗るのは初めてだな、

と気付いてまた苦笑が浮かんだ。

おりしも梅雨の最後の長雨の雨季で、

雨こそ降っていないものの空には厚い黒雲がたちこめている。

その空の下、片は車を走らせる。

十二の年に追い出されるように出てきて以来、

二度といくものかと誓ったはずの仙沢村へ。

続く

第九話

以前は何処へ続くか知らずに辿り始めてしまったあの真新しい国道に出る頃、

ついに空から水滴が落ち始めた。

最初是一粒、二粒フロントグラスに当たる程度だったそれは瞬く間に数メートル先の視界すら煙るほどの雨足にかわる。

片は慎重に運転していく。こんな所で事故に遭う事だけはごめんだった。

以前片が慌てて引き返した標識を通り過ぎ、しばらく走ると道は山の中に入った。

道そのものは相変わらず立派だったが、

削り取ったらしい崖の方は土の上に盛られた

コンクリートが所々大きくひび割れ、

その隙間から水がちよろちよろと流れ落ち

素人目にもずさんな工事である事が判る。

なんどか急なヘアピンカーブをひやひやしながら曲がった時、うっそうと生い茂る木に閉ざされていた視界が急に開けた。

「……」

路肩に車を止め、片は強くなり始めた雨の中、

濡れるのも構わず道路におり立って

その先に広がる仙沢村を見つめる。

目に写る村の風景は十六年前の記憶の中のそれと全く変わっていた。かった。

田舎の景色は都会のそれと変化する速度が違うのだと頭では判っていても、

一年どころか一カ月単位で建物が様変わりしていく東京や、地方都市とはいえ

活気あふれる若槻市の光景を見慣れていた片には、

悪夢が現実になったような空恐ろしさすら感じる。

一つ頭を振ってその感情をむりやり弾き飛ばすと、

片は再び車のハンドルを握った。

慎重な運転のせいで山田との約束の時間を少し過ぎている。

村に入るとさすがに過ぎ去った時の流れを感じる事が出来た。

狭い棚田の間に点在する民家はどれも

記憶の中にあるそれより大分古びている。

いや、古びている、というより寧ろ……。

心に抱いた感覚を上手く言葉にいかえられずモヤモヤとしているうちに、

片は山田が来てくれと指定した公民館についた。

ここに来るまで誰ひとり住民とすれ違わなかったほど寂れた村なのに片が唯一見覚えのない、鉄筋コンクリート造りの

やけに立派な三階建ての建物だ。

すっぽりととり帽子のようにかぶせられた

オレンジ色のメルヘンチックな屋根の

せいかもしれないが、周囲の景色からも妙に浮き上がって見える。

記憶の中にあつた木造の古びた建物の方が良かったなという気持ちと以前の住居でもあつた診療所を見なくて

良かったという気持ちを半分つつ抱えて

車から降りる。人が死んだ診療所など縁起でもないと思われ、取り壊されたのか雨に煙る村内にいくら目を凝らしても、

あの診療所は影も形も見当たらなかった。

「やあ、よく来たな。丈一郎君」

公民館の玄関で、山田はこの間よりも一層愛想よく片を迎えた。

これが普段着なのか、仕事帰りにそのままなのかは判らないが灰色のツナギ姿だ。

「遅かったんだな、皆待ちかねていたんだぞ。こっちだ、こっち」片は挨拶する暇さえなく、

二階の「集会室」とプレートがかけられた部屋に通された。

五十人はゆうに入れそうなカーペットしきの大部屋の隅に固まっていた

十五人程の人々が一斉に片を見つめる。

殆どが六十をとうに越したような年寄りで、その中に二、三人山田より少し年上に見える若い顔が混じっていた。

「これが猿渡先生の支持者の皆さんだ」

胸を張って紹介した山田に、片は今日の集まりは欠席者が多いのかと尋ねる。

「とんでもない、欠席者は寝たきりの

うちの祖父さんだけだ。せっかく丈一郎君が

来てくれたからみんな張り切ってあつまったんだぜ。

それでも村の人口の四分の一なんだぜ」

部屋が大きいせいでかえってわびしく見える小集団を改めて見まわして、

片はそっと溜息をついた。

これで村人の四分の一なら、総人口は100人をきっている計算だ。自分が村に住んでいた時は二〇〇人近い人達がいたと記憶しているから、

一六年の間に人が半減したということになる。

「若い人も大分少ないみたいだな」

「ああ。薄情な連中はみな都会にでていったよ。

あんなゴミゴミした場所の何処がいいんだ

今一番若いのが、近藤のとその孫娘二人かな。

一七才で若槻市の高校に通っている」

……限界集落じゃないか……

片は胸中で呟く。この村はもう「村」としての寿命が尽きかけているのだ。

と同時に、先ほど心に抱いていた感覚を現す言葉がふいに浮かんだ。「朽ちかけている」のだ。もう治療手段がない末期がん患者がただベッドに横たわり静かに最後の時をまっているように。

そう思うと、「立ち退き料」という

新たな生活を始めるための軍資金を残った村人たちに渡してやろうとしている見た事もない」

近藤」という人物のほうが急にまともに思えてきた。

集まった人々は無遠慮に片の全身を眺めまわしている。

その珍し生き物でも観察するかの様子に

片はかつての村での日々を思い出して体が自然とこわばった。

「おい、みんな前に話していた片丈一郎先生、覚えているだろう。

近藤達に自殺に追い込まれた

片敬一郎先生の息子さんで、以前村の小学校に通っていた」

山田の説明によりやく人々は無遠慮な視線を外し、

代わりに納得したようにお互い顔を見合わせて

頷きあう。

「ああ、あの三流医師の」

「ずいぶん立派になって。やっぱりお医者になったんですか」

三流医師、という言葉に片は唇をかみしめた。

死後十年以上たって尚この人々は

父をそう呼ぶのか。だが悔しく、いきおどろしい気持は

別の老いた村人が発した一言に吹き飛んだ。

「それで先生、何時から村に来て下さるんかね」

「おい山田！！」

片の怒鳴り声に、元クラスメートは取り繕うような嫌らしく歪んだ笑みを浮かべた。

「お前、この連中にどんな風に今回の事を説明したんだ」

「丈一郎君の言った通りだよ」

へらへらと笑いながら山田は言った。

「俺達は片敬一郎先生の名譽を猿渡先生といっしょに回復してやる。もう誰にも三流医師なんて

呼ばせやしないさ。でもな、その為にはまず選挙に勝って先生には村長になってもらわなきゃいけない。

その為には先生が村人に公約した村に常在する医師が必要なんだ。
丈一郎君はまさか自分が何もしなくてもいい、なんて思っちゃいないよな。

人から何かしてもらったらお礼をする

それが最低限の礼儀ってもんだろ」

「お前って奴は……」

震える声でやっと片はそれだけを言った。

山田はさらにべらべらと喋り続ける。

「俺もあれから色々調べたんだよ、

テレビでしょっちゅうCM流している片美容整形外科の院長って
丈一郎君のお母さんだったんだな。

あの家に閉じこもりっぱなしだった陰気な小母さんがと
知った時は驚いたよ。この際だ、

君から頼んであのぼろい診療所を建て替えてもらってよ。

医者が首をくくった診療所なんて縁起悪いし、

息子の為だ喜んで資金は出すだろう」

と太い指が差した方を見つめて、片は息を飲んだ。

公民館の入り口と反対側の方向につけられた窓の外には、
あの古びた診療所がひっそりとたっていた。

無人になって長いらしく大分荒れ果てているものの、
何もかもが当時のまま。そう、わずかにみえる

父が首をつった部屋のカーテンまで。

「なあ、丈一郎君、悪い話じゃないだろう。

お父さんの名誉は回復できるし、村は新しい診療所ができる。
若槻市よりこの村の方がのんびりしていて絶対暮らしやすい。

都会に出ていった連中も医師が来たと判れば

帰ってくるかもしれない。全ては丸く収まって村は栄える。万歳だ」
本気で言っているのか、こいつは。と片は思った。

怒りはすでに限界を超え、それが帰って奇妙な冷静さを彼にもたらしている。

父が死んだ時のままの診療所を見たせいもあるかもしれない。周りの人々も、山田を諷めるどころか感心したように彼の言葉に頷いている有り様だ。

ふいに片はここにいる人々全員に恐怖に似た感情を抱いた。

この連中は村にしがみつくとしか考えていない。

その為ならきつとなんでもする。

そしていっぺんの罪悪感も抱く事はないのだろう。

だまし討ちのように自分を村に連れてきて、何度も無理だと

説明したのに、いけしゃあしゃあと村の医師になれと要求する。

まるで井戸の底の中に住むカエルだ。

どんなに水が濁ってもたとえ井戸が泥で埋まりそうであってもここが理想郷だと信じ込み、外の世界に決して目を向けようとしな

い。

そう考えると急に全てが空しくなった。こ

んな連中を少しでも信じた自分が馬鹿だった。

「帰る」

急に鉛のように重くなった体を片は翻した。

「お、おい帰るってなんで。お父さんの名誉を回復したいんじゃないのか」

「君達には無理だよ、やってもらおうとももう思わない」
そう、容易に想像はつく。片がたとえこの村にいついたとしても今度は猿渡の一族とやらが特別扱いを要求し

片は父と同じ三流医師のレッテルをはられるだろう。

彼はよそから来たのだから、村のヒエラルキーでは最下層に位置しなければならぬ。それがこの村にしがみつく人々の理屈だ。

「お前がここに来てくれなきゃ、村はダム底に沈むんだぞ!!」
背中にぶつけられた山田の叫びに片はほの暗い笑みを浮かべた。

「村が抱えている問題を、全て俺に押し付けるなよ」
その笑顔のまま振り返れば、真っ赤な顔をした山田が一瞬ひるむ。

「たとえば俺が人身御供でここにきても、この村は寿命だ。次世代が育っていないから

時期に滅ぶ。近藤さんとやらは良い選択をしたんじゃないかな」

「近藤の肩をもつなんて、この裏切り者が！！」

的外れも甚だしい罵倒に、

片はもう答える気もせずに村人たちに再び背を向けた。

もう、どれだけ言葉をかさねても無駄だ。

『見捨てるのか、俺たちを見捨てるのか。』

医者ってのはそんなに薄情なのか。おい、

答える。丈一郎」

背中にさらにぶつけられる罵倒。

「ああそうだ」

振り返らずに片は答える。

「俺は父親とは違う」

返答が聞こえるより早く、片は後ろ手に集会室の扉を乱暴に閉めた。

続く

第十話

建物中に響き渡るような足音をたてて階段を駆け下り、降り続く雨の中に

傘もささずに飛び出しても、片を追って来る者は誰もいなかった。

全身を濡らしながらランドクルーザーの運転席に乗り込み、ドアを閉めると

ふいに笑いがこみあげてきた。

忍び笑いのような笑い声は、すぐに自分でも耳障りなほど大きなものになる。

悔しくて、情けなくて、消えてしまいたいほど自分が愚かしい。

そんな時でも笑いたくなるのだと、初めて気づいた。

目尻から転がり落ちた涙が頬を伝う。

それをぬぐった濡れた指先で、片は助手席に置いた父の日記帳にそっと触れた。

「帰ろう、父さん」

こんな村、二度と足を踏み入れるべきでなかった。

微かな期待を抱いてやってきた山道を、

重すぎる失望を抱いてのろのろと逆戻りする。

本当はアクセルをめいっぱい踏んで

、一分一秒でも早くこの村が見えない所まで行きたかったが

振り続く雨とうねうねと曲がりくねる道が、それを許さなかった。

そしていくらか行かないうちに、

こちらに向かってやってくる車影を認める。

「……バス、か」

悪天候のせいだろう、昼間でもライトをつけていてくれたのが幸いした。

そうでなければ、ぎりぎりまで接近に気付かなかっただろう。

道路の幅からすれば、すれ違えないわけでもなかったが、片は安全

を考え

車を路肩ぎりぎりまで寄せた。

村の方を見ていたくなかった、

それだけの理由で崖の方を向いていると

ピシリと今まで聞いた事のない妙な音と共に、

大きな罅がコンクリートの表面に奔った。

と、同時にエンジンの振動とは微妙に異なる揺れを足元に感じる。

なんだ、と思うのと車の鼻先を茶色の濁流が

轟音と共に流れていくのは同時だった。

「……な」

何が起こったかようやく理解できたのは、

腹の底を揺さぶるような轟音がやんだ頃。

雨のせいで地盤が緩んだせいなのか、がけ崩れが起こったのだ。

あのまま走り続けたら、きつと巻き込まれていた。

どつと全身から汗が噴き出し、安堵の長いため息が漏れた。

バスのお陰だ、と考えてハッとなった。

慌てて車から降りると、

目に飛び込んできたのは完全に道路をふさいだ

土砂と、それに押し流され、

まるで大型動物の死がいのように道路に横倒しになったバスの姿。

片は慌ててポケットから携帯電話を取り出す。

一刻も早く消防に通報しなければ。

だが、液晶には無情にも圏外の文字が記されている。

「おい、大丈夫か」

雨に濡れながら片はバスに駆け寄った。

「……乗客が、怪我を……」

か細い声で答えたのは、こめかみから血を流し

ハンドルにしがみつくような格好をした運転手だ。

片が手を伸ばすと夢中でそれにしがみついていた。

硝子が割れた窓から彼を引っ張り出し、手早く傷の具合を確認する。

「私は大丈夫ですから、他のお客さんを」

「何人ぐらい乗っていたんだ」

「たしか、15人ほど」

片は頷いて先ほど運転手を引っ張り出した窓から上半身を突っ込む。幸運にもバスは土砂の上を滑るような形で横転したらしく、車内が土が流れ込んでいると言う事はなかった。

「皆さん、大丈夫ですか」

片の呼びかけに乗客たちが細かい返事を上げながら、よろよろと立ち上がった。

どうやら歩けないほど重症者はいないようだ。

安堵しながら、片は乗客たちの脱出を手助けする。

「貴方で最後ですか」

その問いに、足から血を流しながらバスから引っ張り出された中年の女性は首を振った。

「まだ、後一人……中に。声をかけても、動かなくて」

片は女性が外に出るのと入れ替わりに、横倒しになったバスにもぐりこんだ。

割れた窓ガラスが散乱し、ぐらぐらと不安定に揺れるバスの中を注意深く進む。

「もしもし、大丈夫ですか」

残された乗客は一番損傷が激しい後部付近に座席に腰を挟まれる形で倒れていた。

まだ若い、十代後半と思える女性で、何度か大声で呼びかけるとうっすらと目を開いた。

……JCS2-20……

余り状態はよくない。挟まれている個所を指で触るとじつとりと湿った感覚があり

女性が痛そうに顔をゆがめ、小さな声でうめき声を上げた。

下肢に出血あり、さらに骨盤骨折の疑いがある、やっかいだな。

腸骨翼が骨折していた場合、腰動脈が傷つき骨盤内に大出血をして

いる

可能性がある。

とにかく自分ひとりで救助は無理だ。早く助けを呼ばなければ。

「すぐに助けるから、まっっている」

聞こえているかどうか判らないが、女性を励ますとバスからは出る。

他の乗客たちは運転手と一緒に雨に濡れながら路肩に呆然と座り込んでいた。

こちらもいくら軽傷とはいえ、このままではまずい。

一度村に戻り、そこから通報すべきか。と考えた時

村の方から数台の自動車がやってくるのが見えた。

「大丈夫か」

どうやら村からもがけ崩れの様子が見えたらしい。

やってきた十数名の村人は、恐らくバスの乗客の家族なのだろう。

口々に名前を呼びながら怪我をした人々の元に駆け寄っている。

片はその中に山田の顔を見つけた。彼は一瞬気まずげな顔をしたものの

すぐに誰かを探しているのかきよろきよとあたりを見回した。

「おい、これで乗客は全部なのか」

「まだ中に一人取り残されている。10代後半の女性で

骨盤骨折の疑いがあり重症だ。消防に通報はしたのか。

一刻も早く救出して病院に搬送しないと手遅れになるぞ」

矢継ぎ早な片の説明に、山田の顔色がみるみる青ざめていく。

「通報したんだろう」

「通報は、した。だが救急車はいつ来るか判らない」

「どういう事だ」

訊ね返した片に、別の村人が

がけ崩れはここだけではなく、実は三か所同時に起こっていて

若槻市との交通は完全に遮断され、村は今孤立状態にあると泣きそうな顔で

説明した。

「……丈一郎君、中にいるのは女子高生で間違いないんだな」

「十代後半の女性なのは間違いない。知り合いか」

「妹の、美香だ」

山田は呻いた。

片は唇をかみしめる。先ほど見た限り彼女にはいつ来るかわからない救急車を待っている時間はない。

「……彼女を助け出す、手伝え」

数十秒考えて片は決心した。

「助け出すって、俺達は素人だ。怪我人は動かさない方がいいんじゃないのか」

「それは頭を強く打っていた場合だ。俺はさっきバスの中にもぐりこんで

彼女を診た。頭は打っていないが骨盤を骨折している疑いがあり、危険な状態だ。

いつ来るかわからない救急車など待っている余裕はない」

片は居並ぶ村人を睨みつける。仙沢村の人々への憎しみは消えたわけではないが

今は目の前で消えようとしている命を助けるのが先決だ。

「ば、バスから引っ張り出せば助かるのか。美香は」

震える声で問いかける山田に、片は即答した。

「全力は、つくす」

※

幸い残された乗客——山田美香を挟んでいた座席は梃子でも動かない、

といった類のモノではなく数人がかりでそれをどかし、彼女をバスの外に出す事に成功した。

「俺の車に乗せて村に戻ろう」

ランドクルーザーの後部座席を倒し、彼女と山田、そして軽傷者も二人ほど乗せると

片は車をＵターンさせた。他の乗客たちも家族の車に乗せられて後にく。

「村に医療設備や医薬品はあるのか？」

片の問いに、山田は強張った顔で首を振る。

「診療所は１年前に閉鎖されて、医薬品は何も残っていない。

医療設備は、レントゲンくらいはあったと思うが詳しくは知らない。各家庭の救急箱に包帯と消毒薬くらいはあると思うぞ」

……最悪だ……

ハンドルを握っていないければ片は両手を挙げて天を仰ぎたい気分だった。

骨盤骨折と腰動脈出血は疑われる場合、

すぐに腹部大動脈と下部腰動脈の造影を行い

出血が確認できれば輸血をしながら塞栓術を行う必要がある。

「助かるのか、なあ。美香は助かるのか」

繰り返される問いに片は答える事が出来ない。

これから行く先がもし坪内総合病院だったなら、どんなに良かっただろう。

例え自分が研修医ではなく、

１０年修業を積んだベテランの外科医であったとしても

設備も何もない場所で、患者を助けることなどできない。

焼けつくような敗北感が胸を焦がしていく。

「さっきまで我々がいた公民館、あそこを臨時の診療所にしてくれ」

「わかった、村に着いたら各家庭から包帯や消毒薬を集めてくれないよりはましだ」

しかし、諦めるわけにはいかなかった。

村に戻ると、片は美香だけは車に残し他全員を公民館の一室に集めた。

集められた貧弱な医薬品で治療を開始しようとした、その時

「片先生、お電話です。坪内総合病院の小鉢って人から
事務員らしき中年の女性の言葉に片は驚く、
なんで科長が俺がここにいる事を知っている。

「もしもし」

「もしもし、片君 今君は仙沢村にいるのか」

一瞬自分の願望故の空耳かと思った

だが手渡されたコードレスタイプの電話から聞こえてきたのは紛れ
もない

科長の声だ。

「小鉢科長、なんでそれを」

「詳しい話は後だ。1時間ほど前に仙沢村から119番通報があっ
た。

がけ崩れにバスが巻き込まれたとか。

しかし若槻市から村へ通じる道路は複数のがけ崩れで
寸断された状態だ。片君、事故の様子や怪我人の有無は判るか」

「怪我人は15人。うち一人は重傷です。」

JCS2-20、骨盤骨折で腰部大動脈損傷の疑いが濃厚です」

受話器の向こうでなにごとか話し合う声がする。

「医薬品や医療設備は」

「ほぼ皆無です。このままでは重症者は助かりません」

悲鳴のような声で片は報告した。

「わかった。10分待て」

……なんで、と問う前に電話は切れた。それと同時に

「丈一郎君、美香が、美香が」

山田の絶叫が聞こえた。

「どうした」

「様子が、急におかしくなった」

片が車に駆け戻ると、後部座席に寝かせられた美香の顔色は
真っ青で額にうっすらと汗がにじんでいる。

首筋で脈拍を測ると。かなり早い。

出血性ショックの初期症状だ。

「たすかるのか、なあ、助かるのか」

片の厳しい表情を見て、山田が地面にへたり込んでただそれだけを繰り返す。

患者の症状は瞬きをするごとに悪化していく。

片は唇を切れるほど噛みしめた。

設備と物品がなければ、医者なんて何の役にも立たない。

このまま患者がこん睡し、

そして死に至るまでただ黙って見ているだけなのか。

「ちくしょう」

呻くように呟いた時、突風が巻き起こった。

「なに？」

慌てて片が上を見上げると、

暗さを増したそらに銀色の機体が浮かび上がって見えた。

「防災用ヘリコプター」

それはまるで何かを探すように片達の上空を二、三回旋回すると、公民館と道を挟んだ駐車場に静かに着陸する。

そこから大きなかばんをたすき掛けにした小鉢科長と

その妻が駆け下りてくるのを認めた時、

片は驚きとそれを上回る安堵感で、腰が抜けそうになった。

続く

最終話

「片君、重傷者の容態を説明」

小鉢科長のその一言に、片の一瞬緩んでいた心がぴしりと引き締まる。

そうだ、まだ何も終わっちゃいない。

「17才、女性。バスの座席に下肢全体を挟まれ、骨盤骨折の疑い。多分骨盤内で大量出血しています。」

出血性ショックの初期症状を確認しています」

「絵里子」

小鉢女医が頷いて、患者は何処、と尋ねる。

「俺の車の中です」

答えたとたん小鉢女医は身を翻して車に駆け寄った。

「片君の診断で間違いないわ。一刻も早い手術が必要ね。このまま病院に搬送するわ」

私の方を連れてきて正解だった」

「ああ、別当君に連絡して病院についたら即検査、

そして手術が出来るようにしておいてもらってくれ」

小鉢女医は頷いて同乗していたらしい

救命隊員たちと協力して美香を担架に乗せる。

「このまま坪内総合病院まで搬送し、治療を行います」

簡潔な小鉢の説明に、片よりもあっけに取られた表情で

突然ヘリコプターでやってきた医師達を見つめていた山田は、我にかえって

「美香は、美香は助かるんですか」

と小鉢の体に縋らんばかりの勢いで尋ねた。

「全力を尽くします。絵里子頼む」

そう言って小鉢科長はヘリコプターに乗り込もうとする妻の手を強く握りしめた。

一瞬小鉢女医は酷く驚いた顔をしたが、すぐに任せてと力強く頷くと

美香を乗せた担架に続いてヘリコプターに乗り込んだ。

細長い翼がゆっくりと回転を始め、

やがて銀色の機体がふわりと浮きあがり

暗い空に飛び立っていく。

「先生は、い、一緒に行かないんですか」

それを見送る大きなバッグを抱えた小鉢に、山田が尋ねた。

「大丈夫です、彼女は僕より優秀な外科医ですから。

それに、まだここには治療に必要な患者さんが大勢いる。市川君いこう。」

片君患者さんたちはどこにいる」

小鉢科長にそう言われて、片は初めて彼の脇に

市川看護師がいるのに気がついた。

片の視線を感じたのか、彼女は小さく頭を下げる。

「公民館の一室にいます」

片は答えて二人をそこに案内する。

「ありがとう、市川君始めるぞ」

「小鉢科長、俺も」

そう言った片の肩を小鉢はそっと叩く。

「まず腕の泥を落としてずぶぬれの服を着替えてくるんだ。

とてもそのまま患者さんを治療させる事が出来ない」

指摘されて片は初めて自分の酷い格好に気がついた。

「先生、これをどうぞ」

市川看護師が傍らに置いた大きなバッグの中から

真新しい白衣と青いER着を取り出して手渡してくれる。

「もしかして、と思っもってきてよかったです。早く着替えてくださいね

人手が必要なんですから」

淡く微笑する彼女から着替えを受け取ると、

片はすぐ戻ります。と洗面所に飛び込んだ。
手を洗って濡れた服を着替え、白衣を羽織ると
先ほどの絶望感が霧消していくのが判る。

患者のいる部屋にかけもどると、

小鉢科長が片の全身を一瞥し、短く告げた。

「よし、頼むぞ」

「はい!!」

※

命に別条はないとはいえ、怪我をした乗客の大部分が
高齢者で持病を抱えていた為、
診察と治療は慎重におこない、
全てが終わった時には真夜中を過ぎていた。

「御苦労だったね」

最後の患者が部屋を出ていったとたん、
どっと疲労が押し寄せて壁に背中を預ける形で
座りこんでしまった片の前に缶コーヒーが差し出される。

「……科長」

呟いておずおずと缶コーヒーを受け取ると、
小鉢科長は微笑して隣に腰を下ろした。

「片君がここにいてくれて本当に良かった。」

お陰で怪我人の様子が正確に把握できて

防災用ヘリコプターの出動を要請する事が出来た」

ちなみに、この防災用ヘリコプターが

「ドクターヘリ」と名前を変えて

全国に配置されるようになるのは、この二年後の話である。

「科長は、どうして俺がここにいるとわかったんですか」

コーヒーを一口すすって片は尋ねた。

いつもなら甘過ぎると感じる砂糖とミルクのたっぷりとはいった

それが、今はこの上なく美味に感じる。

「お姉さんに行き先を告げていただろう」

そう返されて、片はああ。と納得がいった。

「今日は珍しく僕と絵里子、両方とも休みで家にいたんだ。

彼女は長い事君のお姉さんと電話をしていたよ」

「そうですか」

きっと姉は何度も自分の携帯にも連絡をくれたのだろう。

だがここは圏外で電話は通じない。

彼女はきつと友人の小鉢女医に愚痴る事で、

苛立ちとそして不安を紛らわせていたのだろう。

「だから、仙沢村から救急車の出勤要請が来たが、

道路が不通で到着不可能。ヘリを出動させる必要があるか

怪我人の様子を電話で聞いてほしい、と僕に消防署から依頼があった時、

絵里子がそこに片君がいると

すぐに教えてくれたんだ。いや、本当に助かった」

「それは、よかったです」

心の奥底がじんわりと暖かくなっていくのを片は感じた。

怪我をした人達には悪いがこの一件のお陰で

自分は今日この村に来た事を生涯後悔していかずに済みそうだ。

「……お父さんの名誉は、回復できそうなのかい」

しばらく黙って自分と同じように

コーヒーを啜っていた小鉢科長がぽつりと尋ねた。

「姉が……喋ったのですか」

「多分、ね。絵里子が教えてくれたから。

僕は学生の頃片敬一郎先生が医学雑誌に寄稿した

緩和ケア病棟の構想についての記事を読んで、

とても感銘を受けたんだ。臨床実習で

殆ど効果のない治療を苦しみながら受け続ける患者さんを何人も見たのですね。

直接お会いした事はなかったけれど、夭折を知った時はとても悲しかった。

まさか、この村でそんな辛い目に遭われていたとは」

沈痛な面持ちの小鉢科長に、片は寂しげな笑みを向けた。

「人が、自らの考えを改めるには十六年という時間は短すぎる」

「そうか」

小鉢はそれ以上何も言わず、二人は市川看護師が

遅すぎる夕飯を届けてくれるまで

消毒薬と血の匂いが微かに漂うがらんとした部屋で、

無言のまま並んで座り続けていた。

※

仙沢村と若槻市を結ぶ道路は翌日の昼すぎに復旧した。

「別にこんなことを予想してこの車に乗っていた訳じゃないんですがね」

片は苦笑しながら自分の愛車に小鉢科長と市川看護師を乗せる。

復旧したとはいえ、まだ土砂を取り除いた程度の道路でも

ランドクルーザーなら走行に支障はない。

そして、前に行くのは二台の救急車。それには昨日治療した怪我人の内

病院での検査が必要と小鉢が判断した人達が乗っている。

行き先はもちろん坪内総合病院だ。

「片君……これは」

助手席に乘ろうとした小鉢科長が、そこに置かれた分厚い日記帳を手取る。

「父の、日記です。書く事が好きだったみたいで、

緩和ケアについても色々と記してあります。

よかったら、お読みになりますか」

いいのかい、と訊ね返した小鉢科長に片は頷く。

父の考えに感銘を受けたと言ってくれ、
そして同じような行動をとり続けるこの人にこれを読んで欲しいと
思った。

「父も、自分の考えに感銘を受けた人に読まれるなら、喜ぶでしょう」

※

山間部を抜けるまで、片達は車中からブルーシートに覆われたがけ
崩れの痕や
崩れないまでも、土砂を固めてあるコンクリートに入った大きな罅
を何度も見た。

「随分とずさんな工事をしたみたいですね。昨日の雨くらいで崩れるなんて」

二人の後ろに座っていた市川看護師がポツリと呟いた言葉が印象的
だった。

坪内総合病院に帰ると、早速別当医師と小出女医が
一行に昨日の手術の結果を報告してくれた。

「やっぱり骨盤を骨折していて、骨盤の中に血だまりができていたわ。」

片君が診たててくれていた

お陰でヘリの中である程度処置が出来ていたから、
塞栓術は成功して、命は助かった。でも」

そこで小鉢女医は少し顔を曇らせて、言葉を切った。

「両足が座席の重みで粉碎骨折していてな。」

それだけだったら温存できたんだろうが

やはり骨盤骨折を同時に起こしているのは、無理だった。

多発性外傷は本来うちの領分を超えているんだが

白鳳大学病院は昨日満床だったらしくてな」

隣に立っていた別当医師が説明を引き継ぐ。

「そうか」

「そうですか」

片と小鉢は同時に頷く。両足と命、天秤にかければ傾くのはどちらの方であるかは明らかなのだが

それでも四人の間に悔しさと落胆が入り混じった空気が流れる。

「しかし、片の判断は正しかった。ヘリが到着するまで救出をしていなかったら

命が危なかっただろう。よく救出したな、彼女を」

「どうして……それを」

「ヘリの中で意識を回復した患者さんが教えてくれたの、片君、よくやった」

小鉢女医と別当医師から口々に褒められて、片は一度深く頭を下げた後、言った。

「俺のせいじゃないです。あの時小鉢科長があそこに来てくれたから……」

俺一人じゃ、何も出来なかった。本当にありがとうございました」
片以外の全員が目丸くする。

「随分と殊勝になったな、何があったんだ」

別当がそう呟いた時、廊下の向こうから山田が駆け寄ってきた。彼は道路復旧した直後に、村を出て病院に駆けつけていたのだ。

「どうして、美香は両足を失ったんだ」

荒い息をつきながら怒鳴る山田に、医師達は痛ましげな顔を向ける。

「全力を尽くすと言ったじゃないか」

「全力は尽くしました」

小鉢女医が静かに答える。

「しかし、美香さんの両足は損傷があまりにも激しかった。

骨盤内の出血もひどく

命を助ける為にはそうするしかなかったのです」

「丈一郎君、酷いじゃないか」

小鉢女医の説明を無視して、山田は片に詰め寄った。

「昨日の事に対する意趣返しが、これか。美香は関係ないだろう」
「……っな」

片は唾然とした。昨日の一件で腸が煮えくりかえったのは事実だ。だからと言ってそんな事をするはずがない。

第一山田は彼女の救出から搬送、そしてその後の軽傷者への治療まで全て見ていたはずだ。

「陰険な野郎だな、所詮はよそもんだ。

美香の足をぶったぎって平然としていやがる」

「山田さん」

怒鳴り続ける彼に、さすがに小鉢が口を挟んだ。

「小鉢先生の説明したとおりです。」

妹さんは足を切らなければ命が危なかった。

我々は全力を尽くしました。これが、最善の処置です」

「同感です。それどころか、片医師の診断がなかったら処置が遅れ、もしかしたら

足を切り落としても助からなかったかもしれない」

別当医師がそれに続く。

三人の医師にそういわれて、さすがに山田は数瞬黙りこんだ後

「これだけ医師がそろっていて、

美香の足を助けられなかったのか。つかえねーな。この病院は」
と捨て台詞を残して去って行った。

「つかえない、か」

その後ろ姿を見つめながら片は呟く。

身体が砂になって崩れ去ってしまいそうな空しさが襲ってきた。自分達は必死だった。その姿をずっと見ていて、尚そう言うか。

「俺達は、道具じゃない」

呟きが口から零れおちる。

「道具じゃない、人間だ」

だから、全力を尽くしても限界がある。

なぜ、それを判ってくれない。

どうしてそこまで医者に完ぺきを求める。

「判ってる。君と……そして我々は全力を尽くした」

小鉢医師の言葉は、深くうなだれる医師達の頭上を空しく通過していった。

※

「先生、色々ありがとうございました。

あの、兄がぶつぶつ言ってますけど

私は先生に心から感謝しています」

あの事故から二カ月が過ぎ、

美香は仙沢村に近いリハビリ専門の病院に転院が決定した。

最後まで山田は片達を責め続けたが、

彼女の一言に随分と救われた気持ちになる。

そして、あの日以来片はぴたりと小鉢科長への反抗をやめた。

当然職員たちの間では憶測が乱れ飛び、結果的に

「仙沢村まで遊びに出かけた片医師が、

偶然土砂崩れに巻き込まれ怪我人を目の前に

にっちもさっちも行かなくなった所に、

小鉢科長が駆けつけてくれたので頭が上がりなくなった」

という説が採用され、片と小鉢を含め誰もそれを否定しなかった。

晶子は、後日電話をして事の顛末を報告したところ

「なんであんたは考えなしの事をするん？」

と一しきり怒られた後

「もう、全て忘れてしまい。それが一番の復讐や。

あんたの話からするとあの村はもう長くないんやろ」

まるで自分に言い聞かせるように慰められた。

そして、夏が終わると共に、片の派遣期間も終了した。

「今までありがとう。本当に助かったよ」

そう言った小鉢科長に、片は唯頭を下げた。

多分二度とこの病院に来る事はないだろうが、一生忘れられない日々になることは間違いない。

「長い間、借りていて悪かった。隅々まで読ませてもらったよ」
そつと差し出された日記帳を片は頷いて受け取る。

「片君は僕をずっと諫めていてくれたんだな」

理由はどうあれ、心身の限界を超えた努力は結局最悪な結果しか生み出さない。

「そんなんじゃないです」

片は苦笑して首を振る。

「俺は科長にもう少し器用に賢く立ちまわって欲しかった。それだけです」

心身、家族、全て犠牲にして医療に貢献する。

一見美談に見えるそれはそれを享受する側を増長させてしまう。

いつ、いかなる時でも最高の治療を一刻も早く受けさせろ。

失敗は、許さない。

「俺達は、道具じゃないですから」

「そうだな」

二人の医師は誰もいない医局でそつと寂しそうに笑いあう。

「余計なお世話かもしれないが、これを」

ひとしきり笑った後、小鉢医師がもう一度差し出したものは

電話番号と住所が書いてあるメモだった。怪訝な顔をした片に

「自殺や突発的な事故で突然家族を失った人々が集う会だ。」

悲しみは一人で抱え込むより、皆で分かち合った方が早く薄れる」

「御自分も、そうなさってください」

そう言いながらも片はメモを受け取った。そして

「ご指導、ありがとうございました」

最後に深く一礼をし、片は医局を後にした。

※

秋が過ぎ、冬が来た。白鳳大学に戻った片は
非人間的な研修医のスケジュールをこなしながら
やっとなる場所を訪れた。

小鉢医師のメモに書かれていた住所。そこは小さな教会。

葉を散らせた植え込みの中に建てられた小さな看板には、確かに

「突然家族を失った方々の集い、会場」と書かれている。

入ろうか、どうしようか迷っていると、いきなり背中をぽんと叩かれた。

「君は」

「片先生、お久しぶりです」

ぺこりと頭を下げたのは、市川看護師だ。

少し髪が伸びて女性らしさがましている。

「やっとな、来てくれたんですね」

「君も、この会に来ているの？」

こくりと彼女は頷いた。

「私、学生時代に両親を交通事故で亡くしているんです。

自分ではもう乗り越えたつもりなんですけど

時折無性に寂しくなるんです。そんな時、ここにきています。

小鉢えっと、絵里子先生の方も

よく来ていますよ。小鉢科長は一回来ただけですけど」

そこまで一気に言いきって、市川看護師はあ、と何かを思い出した
ようだった。

「そういえば、私まだ、先生に生理用食塩水をぶつけた事、謝って
なかった」

「いいよ、もう時効だ」
片は苦笑した。

「でももし、市川さんがちょっとでも申し訳ないな、と思っている
んだったら

会の間、その、隣に座っていてもいいだろうか」

その言葉に市川看護師は少し目を見開き、そして微笑する。

「お安いご用です、大丈夫です。皆いい人達ばかりですから」

※

春が来た。後期研修も間もなく修了する。

片が母親から呼び出しを受けたのはそんな時だった。

「久しぶりね、元気？」

家ではなく、片美容整形外科の院長室で久しぶりに会った母は姉と同じように年よりずっと若々しく見えた。

「ああ、お陰さまで。病院も相変わらず繁盛しているみたいだね」どこかきこちなく答えながら、片はイタリア製の高級ブランドのソファに腰を下ろす。

ここはまるで病院と言うより一流のホテルのような内装だ。

スタッフも医療従事者というより

サービス業の躰けられた愛想の良さがあり、そして訪れるのは疾患を抱えた人ではなく

美の為に多額のお金を支払える人たち。

「研修が修了した後のことは決めているの？」

首を振った片に、母は小さく頷く。

「アメリカに行く気はある？」

「アメリカ？」

「そうよ。受け入れ先と話はついているから、医局を通す必要はないわ。」

最新の美容外科を学んできて欲しいの」

「そして、この病院を継ぐ」

もう一度母は頷いた。

片は黙り込む。多分、これ以上ないほど幸運な話だ。

他人が血がにじむような努力をして切り開くような道が、自分の前にはすでに出来ている。

しかし……。

片の脳裏に坪内総合病院で過ごした日々が鮮やかによみがえる。戦場のような現場、一瞬で下さねばならない重要な判断。命を救う現場で

自分達は命を削るような思いをしていた。しかし、三途の川を渡りかけていた患者が

再び息を吹き返した時の充実感。

ああ、だめだな。と片は心中で苦笑した。俺はジャズの虜になっちまってる。

もう、お上品なクラシックじゃ満足しないんだ。

「母さん、すぐく恵まれた話をありがとう」

そう言った片の表情で、母全てを察したらしい。

「いいわ、無理やり留学させてもしようがないから。

貴方は貴方の信じた道を行きなさい私には、晶子がいる」

ソファと同じブランドの高い背もたれのついた回転いすに

沈みこむように座りながら母は告げた。

「ごめんね、そしてありがとう……母さん」

「なに？」

少し黙った後、片は先日新聞の地方版の片隅に乗っていた記事の内容を告げる。

「仙沢村、ダムの底に沈むんだって」

あのがけ崩れがきっかけで、道路の手抜き工事が発覚した事が決め手になったらしい。

残った数少ない住民たちは、立ち退き料をもらって村を出て行く。

井戸を壊された怯えるカエルのように。

「そう」

短く呟いたつきり、母は黙った。

その全身から徐々に力が抜けて行く。まるで鎧を脱ぐように。

「随分と休んでいないわね」

それが、私は、いや、私たち家族はあんた達に見下されるような存在じゃない。

と言外に訴え続けてきた母の静かな終戦宣言だった。

「少し、休んだらいいよ。病院は姉さんがいるんだろ」

「そうね、丈一郎、久しぶりにお父さんのお墓参り、一緒に行こうか」

片は頷いた。

「もうじき父さんの好きだった桜が咲くし、丁度いいよ」

※

同じ季節。坪内総合病院救急外来、医局。

さき始めた桜が硝子窓の外で揺れている。

「ついに救急救命医の指導医の資格をとったのか」

「ああ」

別当医師のどこかあきれたような物言いに、小鉢は短くうなずいた。

「これである程度経験を積んだ医師が、

認定医になる為に来てくれるかもしれない」

「お前なあ、患者を治療しながら後輩指導までするのか。体が持たんぞ」

「わかつている、楽をしたいからこの手を使うんだ。優秀な後任が育てば

僕は科長室でのんびりできる」

「そううまくいくかねえ」

ため息をつく別当医師に、小鉢科長は軽く笑って
実はもう一人希望者がいるんだと告げた。

「誰だよ、そんなモノ好き」

「先生もよく知っている人ですよ、口は悪いけど腕はぴか一だ」
「……本当にお前はモノ好きだな！、上手く調教しろよ。」

とんでもない暴れ馬だからな、あの馬鹿は」

もう一度大きなため息をつく別当医師に小鉢はわかっています。
と笑いながら頷いた。

※

桜が満開になった春半ば、坪内総合病院救急外来科に一人の専門研修医が入ってきた。

「お久しぶりです」

頭を下げた片に、小鉢は

「おかえり」

と答える。

「今度は少なくとも四年。よろしく願います」

「今回は前のようなお客さん扱いはいらない。覚悟はいいかな」
指導医の言葉に片は力強くうなずいた。

「はい」

エピローグ

半年後、クリスマス。

「どうも、色々ありがとうございました」

両頬に目立つ傷のある青年は、

そう言って深く頭を下げると葬儀社の用意した

黒塗りの大型車に乗り込んだ。

坪内総合病院には、幾つかの出入り口がある。

その中でこれから青年が出て行こうとする

出入り口は、最も目立たぬ場所にあり、笑顔でそこを出て行く者は誰もいない。

無言の帰宅、病院で死亡した患者を送り出す専用口。

片は何度もそこから去っていく患者だった人たちを見送ってきた、だが、これほど

悔しく、やるせない思いを抱いたてここに来たのは初めてだ。

「繭、帰ろう」

シーツに包まれた骸に優しく青年は声をかける。

死者と彼は昨日、病室で夫婦となったばかりだった。

片は無言で青年に頭を下げる。

数日前、繭と言う名前だった死者が搬送されてきた時、

この馬鹿野郎、命を粗末にしゃがってと腹がたった。

まだ一七才、人生に絶望するのは早すぎる

だが、その理由を知ったとき、愕然とした。そして何とか救ってやりたいと思った。

しかし、その願いはかなうことなく、彼女は彼岸に渡ってしまった。命を救えなかった医師は、何も言えない。

青年の乗った車が完全に見えなくなった後、片は屋上に上った。

一人になりたい。だがそこには先客がいた。

「すいません」

給水塔の下で、真っ赤になった目を

ハンカチで押さえながら市川看護師は震える声で言った。

「もう新人でもないのに、何人もみとっているのに、なんでか今日は涙が、とまらなくて」

そう言っただけ彼女はまだ一度ハンカチで目頭を押さえる。

その華奢な両肩を、彼はすっぽりと両腕で包み込んだ。

「片先生？」

「悪い……何もしないから、少しだけこのままでもいいさせてくれ」

その耳元で、片は囁く。

「俺も同じ気分だから」

ややあって返された、

はい。と言う返事に片は彼女を抱く手に力を込めた。

※

それから七年後の、秋

「今日から内科と外科の研修医がいれかえですか。せっかく使えるようになったのに」

「しょうがない、新研修医制度でうちに

研修医が来てくれただけでも恩の字なんだから」

「今度は使える奴だといいいんですけどね」

「指導医しだいだろう。あんまり喧嘩をするなよ」

「わかっています」

片は頷いた。認定医の資格をとっても、

彼は相変わらずこの病院でそして小鉢科長の下で

働き続けていた。指導される立場から、する立場になってすでに二年。

相変わらず自分の後続く常勤医はなし。

その現実には苦く笑いながら、片は新しくやってくる研修医を出迎える。

「佐々木、兵衛です」

自己紹介をして頭を上げた研修医の顔を見て、片は息を飲む。

その両頬をはしる酷い傷痕には、はっきりと見覚えがあった。

七年前のクリスマス、自分が救えなかった患者の、夫。

あの時、まだ少年の面影が色濃く残った青年であった彼は今日の間に白衣を着て立っている。

……医者に、なったのか……

「片、先生ですよ。ずっと昔にお会いした事があるんですが、覚えていらっしゃるでしょうか」

「……ああ」

久しぶりとは言わなかった、言えなかった。

あの時自分は敗北者だったのだから。

なぜ医者になったのか、聞く必要はないだろう。

「御指導、よろしく願います」

もう一度頭を下げた佐々木に片は頷く。

頭を下げるのは俺の方だ。俺は君の大切な人を救えなかった。

その代わり、限られた時間ではあるが俺のもっている技術を可能な限り教えてやる

「よし、まずは一通りここを案内してやる。そして後は実戦で覚えろよ

覚悟しろよ、戦場だから」

勢いをつけて、片は椅子から立ち上がった

終わり。

最終話（後書き）

どうも、長いお話をお読みいただきありがとうございました。

有志企画「職業小説」に「医師」をテーマに投稿させていただく
予定で書きあげた小説です。

スーパードクターなんか絶対に書かない。

今日本が抱えている医療問題を書いてやれと

素人ながらに勢い込んだ結果が随分と暗い小説に仕上がりました
後味が悪いでしょうが、これが現実の一部です。

テレビや雑誌では救急車の受け入れ拒否が問題になっています
医師バッシングもひどいです。しかし、本当に悪いのは医師だけで
すか

医療を受ける私たちの方に問題はないのですか？

この小説の中で、片敬一郎医師が受けた仕打ちは、実際に秋田県の
ある村の医師に対して行われた出来事です。

お医者さん達は限界を超えて頑張っている それを伝えたかった。

尚、この小説を書くにあたり、現役の医師及び看護師の方に
数多くの助言を頂きました、この場を借りて御礼申し上げます

本編はこれで完結ですがあまりにも暗すぎるので
外伝を一つつけようと思います

ご感想いただければ大変うれしいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3980/>

You Are Not ONLY ～Dr 佐々木シリーズ外伝～

2010年10月9日17時26分発行